

71
600



始



71-600



將

軍

■ 代表的名作選集 (37)

芥川龍之介作

大正 11. 3. 14 内交

東京 新潮社 出版

解題

本集に收められた九篇のうち、『鼻』は作者の處女作にして同時に出世作とも云ふ可きものである。大正五年一月、作者が久米、菊池の諸氏と共に刊行してゐた『新思潮』の創刊號にこの篇を發表するや、夏目漱石大にこれを推賞した。『羅生門』は、これより前、大正四年九月『帝國文學』に公にされたもの、作者の傑作の一つであるに拘らず、發表當時は毫も世の視聽を惹かなかつた。『虱』は、大正五年三月『希望』といふ雜誌に、『手巾』は、大正五年九月『中央公論』に、『猿』は大正五年八月、前記『新思潮』に、『運』は、大正五年十二月『文章世界』に、『秋』は、大正九年四月『中央公論』に、『藪の中』は、大正十一年一月『新潮』に、『將軍』は同じく一月『中央公論』に於て發表されたもので、就中『秋』は、作者が從來の作風から一步を出でようとした試みとして、世評を動かした作である。

編者識



芥川龍之介著

將 羅 鼻 猿 運 藪 手 風 秋

の 生

軍 門 中 巾

.....一
.....二
.....三
.....四
.....五
.....六
.....七

明治三十七年十一月二十六日の未明だった。第X師團第X聯隊の白禪隊は、松樹山の補備砲臺を奪取する爲に、九十三高地の北麓を出發した。

路は山陰に沿うてゐたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だった。その草もな
い薄闇の路に、銃身を並べた一隊の兵が、白禪ばかり仄かせながら、靜かに靴を鳴らして
行くのは、悲壯な光景に違ひなかつた。現に指揮官のM大尉などは、この隊の先頭に立つ
た時から、別人のやうに口數の少ない、沈んだ顔色をしてゐるのだった。が、兵は皆思ひ
の外、平生の元氣を失はなかつた。それは一つには日本魂の力、二つには酒の力だった。
少時行進を續けた後、隊は石の多い山陰から、風當りの強い河原へ出た。

「おい、後を見ろ。」

紙屋だつたと云ふ田口一等卒は、同じ中隊から選抜された、これは大工だつたと云ふ、
堀尾一等卒に話しかけた。

「みんなこつちへ敬禮してゐるぜ。」

堀尾一等卒は振り返つた。成程さう云はれて見ると、黒々と盛り上つた高地の上には、
聯隊長始め何人かの將校たちが、やや赤らんだ空を後に、この死地に向ふ一隊の士卒へ、
最後の敬禮を送つてゐた。

「どうだい？ 大したものぢやないか？ 白禪隊になるのも名譽だな。」

「何が名譽だ？」

堀尾一等卒は苦々しさに、肩の上の銃を揺り上げた。

「こちとらはみんな死に行くのだけ。して見ればあれは××××××××××××××××××
さうつて云ふのだ。こんな安上りな事はなからうぢやねえか？」

「それはいけない。そんな事を云つては××××すまない。」

「べらぼうめ！ すむもすまねえもあるものか！ 酒保の酒を一合買ふのでも、敬禮だけ
では賣りはしめえ。」

田口一等卒は口を噤んだ。それは酒氣さへ帯びてゐれば、皮肉な事ばかり並べたがる、
相手の癖に慣れてゐるからだつた。しかし堀尾一等卒は、執拗にまだ話し續けた。

「それは敬禮で買ふとは云はねえ。やれ××××××とか、やれ××××××だとか、いろん

江木上等兵は暗い顔をした儘、何ともその冗談に答へなかつた。

何時間かの後、この歩兵陣地の上には、もう彼我の砲弾が、凄まじい唸りを飛ばせてゐた。目の前に聳えた松樹山の山腹にも、李家屯の我海軍砲は、幾たびか黄色い土煙を揚げた。その土煙の舞ひ上る合間に、薄紫の光が逆るのも、晝だけに、一層悲壯だつた。しかし二千人の白襪隊は、かう云ふ砲撃の中に機を待ちながら、やはり平生の元氣を失はなかつた。又恐怖に挫がれない爲には、出来るだけ陽氣に振舞ふ外、仕様のない事も事實だつた。

「べらぼうに撃ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。その拍子に長い叫び聲が、もう一度頭上の空氣を裂いた。彼は思はず首を縮めながら、砂埃の立つのを避ける爲か、手巾に鼻を掩つてみた、田口一等卒に聲をかけた。

「今のは二十八珊だぜ。」

田口一等卒は笑つて見せた。さうして相手が氣のつかないやうに、そつとポケットへ手巾をさめた。それは彼が出征する時、馴染の藝者に貰つて來た、縁に繻のある手巾だつた。

た。

「音が違ふな、二十八珊は。——」

田口一等卒はかう云ふと、狼狽したやうに姿勢を正した。同時に大勢の兵たちも、聲のない號令でもかかつたやうに、次から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN將軍が、何人かの幕僚を従へながら、嚴然と歩いて來たからだつた。

「こら、騒いではいかん。騒ぐではない。」

將軍は陣地を見渡しながら、やや錆のある聲を傳へた。

「かう云ふ狹隘な所だから、敬禮も何もせなくとも好い。お前達は何聯隊の白襪隊ぢや？」
田口一等卒は將軍の眼が、彼の顔へちつと注がれるのを感じた。その眼は殆處女のやうに、彼をはにかませるのに足るものだつた。

「はい。歩兵第X聯隊であります。」

「さうか。大元氣にやつてくれ。」

將軍は彼の手を握つた。それから堀尾一等卒へ、じろりとその眼を轉ずると、やはり右手をさし伸べながら、もう一度同じ事を繰返した。

「お前も大元氣にやつてくれ。」

かう云はれた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化したやうに、直立不動の姿勢になった。幅の広い肩、大きな手、頬骨の高い緒ら顔。——さう云ふ彼の特色は、少くともこの老將軍には、帝國軍人の模範らしい、好印象を與へた容子だつた。將軍は其處に立ち止まつた儘、熱心になほ話し續けた。

「今打つてゐる砲臺があるな。今夜お前たちはあの砲臺を、こつちの物にしてしまふのぢや。さうすると豫備隊は、お前たちの行つた跡から、あの界限の砲臺をみんな手に入れてしまふのぢや。何でも一遍にあの砲臺へ、飛びつく心にならなければいかん。——」

さう云ふ内に將軍の聲には、何時か多少戯曲的な、感激の調子かはひつて來た。

「好いか？ 決して途中に立ち止まつて、射撃などをするぢやないぞ。五尺の體を砲彈だと思つて、いきなりあれへ飛びこむのぢや、頼んだぞ。どうか、しつかりやつてくれ。」

將軍は「しつかり」の意味を傳へるやうに、堀尾一等卒の手を握つた。さうして其處を通り過ぎた。

「嬉しくもねえな。——」

堀尾一等卒は狡猾さうに、將軍の跡を見送りながら、田口一等卒へ目交せをした。

「え、おい。あんな爺さんに手を握られたのぢや。」

田口一等卒は苦笑した。それを見るとどうも譯か、堀尾一等卒の心の中には、何かに濟まない氣が起つた。と同時に相手の苦笑が、面憎いやうな心もちにもなつた。其處へ江木上等兵が、突然横合ひから聲をかけた。

「どうだい、握手で××××のは？」

「いけねえ。いけねえ。人眞似をしちや。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはゐられなかつた。

「××れると思ふから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思つてゐる。」

江木上等兵がかう云ふと、田口一等卒も口を出した。

「さうだ。みんな御國の爲に捨てる命だ。」

「おれは何の爲だか知らないが、唯捨ててやるつもりなのだ。××××××××でも向けられて見る。何でも持つて行けと云ふ氣になるだらう。」

江木上等兵の眉の間には、薄暗い興奮が動いてゐた。

辯は參謀の心に、明瞭ならば明瞭なだけ、一層彼等を間諜にしたい、反感に似たものを與へるらしかった。

「おい歩兵！」

旅團參謀は鼻聲に、この支那人を捉へて來た、戸口にゐる歩哨を喚びかけた。歩兵、——それは白襪隊に加はつてゐた、田口一等卒に外ならなかつた。——彼は戸の卍字格子を後うしろに、藝者の寫眞へ目をやつてゐたが、參謀の聲に驚かされると、思ひ切り大きい答をした。

「はい。」

「お前だな、こいつらを掴まへたのは？ 掴まへた時はどんなだつたか？」

人の好い田口一等卒は、朗讀的にしゃべり出した。

「私が歩哨に立つてゐたのは、この村の土塀の北端、奉天に通ずる街道であります。その支那人は二人とも、奉天の方向から歩いて來ました。すると木の上の中隊長が、——」

「何、木の上の中隊長？」

參謀はちよいと目蓋を擧げた。

「はい。中隊長は展望の爲、木の上に登つてゐられたのであります。——その中隊長が木の上から、掴まへると私に命令されました。」

「所が私が捉へようとする、そちらの男が、——はい。その髯のない男であります。その男が急に逃げようとなりました。……」

「それだけか？」

「はい。それだけであります。」

「よし。」

旅團參謀は血肥りの顔に、多少の失望を浮べた儘、通譯に質問の意を傳へた。通譯は退屈あはれを露さない爲、わざと聲に力を入れた。

「間諜でなければ何故逃げたか？」

「それは逃げるのが當然です。何しろいきなり日本兵が、躍りかかつてきたのですから。」

もう一人の支那人、——鴉片の中毒に罹つてゐるらしい、鉛色の皮膚をした男は、少しも怯まずに返答した。

「しかしお前たちが通つて來たのは、今にも戰場になる街道ぢやないか？ 良民ならば用

もないのに、——」

支那語の出来る副官は、血色の悪い支那人の顔へ、ちらりと意地の悪い眼を送つた。

「いや、用はあるのです。今も申し上げた通り、私たちは新民屯へ、紙幣を取り換へに出かけて来たのです。御覽下さい。此處に紙幣もあります。」

髯のある男は平然と、將校たちの顔を眺め廻した。參謀はちよいと鼻を鳴らした。彼は副官のたじろいだのが、内心好い氣味に思はれたのだ……。

「紙幣を取り換へる？ 命がけでか？」

副官は負惜みの冷笑を洩らした。

「兎に角裸にして見よう。」

參謀の言葉が通譯されると、彼等はやはり悪びれずに、早速赤裸になつて見せた。

「まだ腹巻をしてゐるぢやないか？ それをこつちへとつて見せろ。」

通譯が腹巻を受けとる時、その白木棉に體温のあるのが、何だか不潔に感じられた。腹巻の中には三寸ばかりの、太い針がはいつてゐた。旅團參謀は窓明りに、何度もその針を檢べて見た。が、それも平たい頭に、梅花の模様がついてゐる外、何も變つた所はなかつ

た。

「何か、これは？」

「私は鍼醫です。」

髯のある男はためらはずに、悠然と參謀の間に答へた。

「次手に靴も脱いで見ろ。」

彼等は殆無表情に、隠すべき所も隠さうとせず、検査の結果を眺めてゐた。が、ズボンや上着は勿論、靴や靴下を檢べて見ても、證據になる品は見當らなかつた。この上は靴を壞して見るより外はない。——さう思つた副官は、參謀にその旨を話さうとした。

その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司令部の幕僚や、旅團長などがはいつて来た。將軍は副官や軍參謀と、丁度何かの打ち合せの爲、旅團長を尋ねて来てゐたのだつた。

「露採か？」

將軍はかう尋ねた儘、支那人の前に足を止めた。さうして彼等の裸姿へ、ちつと鋭い眼を注いだ。後に或亞米利加人が、この有名將軍の眼には、*Monomania* じみた所がある

と、無遠慮な批評を下した事がある。——そのモノメニアックな眼の色が、殊にかう云ふ場合には、氣味の悪い輝きを加へるのだつた。

旅團參謀は將軍に、ざつと事件の顛末を話した。が、將軍は思ひ出したやうに、時々頷いて見せるばかりだつた。

「この上はもうぶん擲つてでも、白状させる外はないのですが、——」

參謀がかう云ひかけた時、將軍は地圖を持つた手に、床の上にある支那靴を指した。

「あの靴を壊して見給へ。」

靴は見る見る底をまくられた。すると其處に縫ひこまれた、四五枚の地圖と祕密書類が、忽ちばらばらと床の上に落ちた。二人の支那人はそれを見ると、さすがに顔の色を失つてしまつた。が、やはり押し黙つた儘、剛情に敷衍を見つめてゐた。

「そんな事だらうと思つてゐた。」

將軍は旅團長を顧みながら、得意さうに微笑を洩した。

「しかし靴とは又考へたものですね。——おい、もうその連中には着物を着せてやれ。——こんな間隙は始めてです。」

「軍司令官閣下の炯眼には驚きました。」

旅團副官は旅團長へ、間隙の證據品を渡しながら、愛嬌の好い笑顔を見せた。——恰も靴に目をつけたのは、將軍よりも彼自身が、先だつた事も忘れたやうに。

「だが裸にしてもないとすれば、靴より外に隠せないぢやないか？」

將軍はまだ上機嫌だつた。

「わしはすぐに靴と睨んだ。」

「どうもこの邊の住民はいけません。我々が此處へ來た時も、日の丸の旗を出したですが、その癖家の中を調べて見れば、大抵露西亞の旗を持つてゐるのです。」

旅團長も何か浮き浮きしてゐた。

「つまり奸佞邪智なのぢやね。」

「さうです。煮ても焼いても食へないのです。」

こんな會話が續いてゐる内、旅團參謀はまだ通譯と、二人の支那人を調べてゐた。それが急に田口一等卒へ、機嫌の悪い顔を向けると、吐き出すやうにかう命じた。

「おい歩兵！ この間隙はお前か掴まへて來たのだから、次手にお前が殺して來い。」

二十分の後、村の南端の路ばたには、この二人の支那人が、互に辮髪を結ばれた儘、枯柳の根がたに坐つてゐた。

田口一等卒は銃剣をつけると、まづ辮髪を解き放した。それから銃を構へた儘、年下の男の後に立つた。が、彼等を突殺す前に、殺すと云ふ事だけは告げたいと思つた。

「儂、——」

彼はさう云つて見たが、「殺す」と云ふ支那語を知らなかつた。

「儂、殺すぞ！」

二人の支那人は云ひ合せたやうに、じろりと彼を振り返つた。しかし驚いたけはひも見せず、それぎり別々の方角へ、何度も叩頭を續け出した。「故郷へ別れを告げてゐるのだ、」

——田口一等卒は身構へながら、かうその叩頭を解釋した。

叩頭が一通り済んでしまふと、彼等は覺悟をきめたやうに、冷然と首をさし伸した。田口一等卒は銃をかざした。が、神妙な彼等を見ると、どうしても銃剣が突き刺せなかつた。

「儂、殺すぞ！」

彼はやむを得ず繰返した。するとそこへ村の方から、馬に跨つた騎兵が一人、蹄に砂埃

を巻き揚げて來た。

「歩兵！」

騎兵は——近づいたのを見れば曹長だつた。それが二人の支那人を見ると、馬の歩みを緩めながら、傲然と彼に聲をかけた。

「露探か？ 露探だらう。おれにも、一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑した。

「何、二人とも上げます。」

「さうか？ それは氣前が好いな。」

騎兵は身輕に馬を下りた。さうして支那人の後にまはると、腰の日本刀を抜き放した。

その時又村の方から、勇しい馬蹄の響と共に、三人の將校が近づいて來た。騎兵はそれに頓着せず、まづ向に刀を振り上げた。が、まだその刀を下さない内に、三人の將校は悠々と、彼等の側へ通りかゝつた。軍司令官！ 騎兵は田口一等卒と一しよに、馬上の將軍を見上げながら、正しい擧手の禮をした。

「露探だな。」

將軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！ 斬れ！」

騎兵は言下に刀をかざすと、一打に若い支那人を斬つた。支那人の頭は躍るやうに、枯柳の根もとに轉げ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑點を擴げ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快さうに頷きながら、それなり馬を歩ませて行つた。

騎兵は將軍を見送ると、血に染んだ刀を提げた儘、もう一人の支那人の後に立つた。その態度は將軍以上に、殺戮を喜ぶ氣色があつた。「この×××らばおれにも殺せる。」——田口一等卒はさう思ひながら、枯柳の根もとに腰を下した。騎兵は又刀を振り上げた。が、髻のある支那人は、黙然と首を伸ばしたぎり、睫毛一つ動かさなかつた。……

將軍に従つた軍參謀の一人、——穂積中佐は鞍の上に、春寒の曠野を眺めて行つた。が、遠い枯木立や、路ばたに倒れた石敢當も、中佐の眼には映らなかつた。それは彼の頭には、一時愛讀したスタンダールの言葉が、絶えず漂つて來るからだつた。

「私は勳章に埋つた人間を見ると、あれだけの勳章を手に入れるには、どの位××な事は

かりしたか、それが氣になつて仕方がない。……」

——ふと氣がつけば彼の馬は、ずつと將軍に遅れてゐた。中佐は軽い身震をすると、すぐに馬を急がせ出した。丁度當り出した薄日の光に、飾緒の金をきらめかせながら。

三 陣中の芝居

明治三十八年五月四日の午後、阿吉半堡に駐つてゐた、第×軍司令部では、午前に招魂祭を行つた後、餘興の演藝會を催す事になつた。會場は支那の村落に多い、野天の戲臺を應用した、急拵の舞臺の前に、天幕を張り渡したに過ぎなかつた。が、その席敷きの會場には、もう一時の定刻前に、大勢の兵卒が集つてゐた。この薄汚いカーキイ服に、銃劍を下げた兵卒の群は、ほくと斧看客と呼ぶのさへも、皮肉な感じを起させる程、みじめな看客に違ひなかつた。が、それだけ又彼等の顔に、晴れ晴れした微笑が漂つてゐるのは、一層可憐な氣がするのだつた。

將軍を始め軍司令部や、兵站監部の將校たちは、外國の從軍武官たちと、その後の小高い土地に、ずらりと椅子を並べてゐた。此處には參謀肩章だの、副官の裨だのが見えるだ

けでも、一般兵卒の看客席より、遙かに空気が花やかだつた。殊に外國の從軍武官は、愚物の名の高い一人でさへも、この花やかさを扶ける爲には、軍司令官以上の効果があつた。

將軍は今日も上機嫌だつた。何か副官の一人と話しながら、時々番付を開いて見てゐる

——その眼にも始終日光のやうに、人懐こい微笑が浮んでゐた。

その内に定刻の一時になつた。櫻の花や日の出をとり合せた、手際の好い幕の後では、何度か鳴りの悪い拍子木が響いた。と思ふとその幕は、餘興掛の少尉の手に、するすると一方へ引かれて行つた。

舞臺は日本の室内だつた。それが米屋の店だと云ふ事は、一隅に積まれた米俵か、僅かに暗示を與へてゐた。其處へ前垂掛けの米屋の主人が、「お鍋や、お鍋や」と手を打ちながら、彼自身よりも背の高い、銀杏返しの下女を呼び出して來た。それから、——筋は話すにも足りない、一場の俄が始まつた。

舞臺の悪ふざけが加はる度に、席敷の上の看客からは、何度も高聲が立ち昇つた。いや、その後の將校たちも、大部分は笑を浮べてゐた。が、俄はその笑を競ふやうに、益々滑稽を重ねて行つた。さうしてとうとうしまひには、越中禪一つの主人が、赤い湯もじ一つの

下女と相撲をとり始める所になつた。

笑聲は更に高まつた。兵站監部の或大尉などは、この滑稽を迎へる爲、殆拍手さへしよ
うとした。丁度その途端だつた。突然烈しい叱咤の聲は、湧き返つてゐる笑の上へ、鞭を
加へるやうに響き渡つた。

「何だ、その醜態は？ 幕を引け！ 幕を！」

聲の主は將軍だつた。將軍は太い軍刀の欄に、手袋の兩手を重ねた儘、嚴然と舞臺を睨んで居た。

幕引きの少尉は命令通り、呆氣にとられた役者たちの前へ、倉皇とさつき幕を引いた。同時に席敷の看客も、かすかなどよめきの聲の外は、ひっそりと静まり返つてしまつた。

外國の從軍武官たちと、一つ席にゐた穂積中佐は、この沈黙を氣の毒に思つた。俄は勿論彼の顔には、微笑さへも浮ばせなかつた。しかし彼は看客の興味に、同情を持つだけの餘裕はあつた。では外國武官たちに、裸の相撲を見せても好いか？——さう云ふ體面を重
ずるには、何年か歐洲に留學した彼は、餘りに外國人を知り過ぎてゐた。
「どうしたのですか？」

佛蘭西の將校は驚いたやうに、穂積中佐をふりかへつた。

「將軍が中止を命じたのです。」

「なぜ？」

「下品ですから、——將軍は下品な事は嫌ひなのです。」

さう云ふ内にもう一度、舞臺の拍子木が鳴り始めた。静まり返つてゐた兵卒たちは、この音に元氣を取り直したのか、其處此處から拍手を送り出した。穂積中佐もほつとしながら、彼の周圍を眺め廻した。周圍にゐる並んだ將校たちは、いづれも幾分か氣兼ねさうに、舞臺を見たり見なかつたりしてゐる、——その中にたつた一人、やはり軍刀へ手をのせた儘、丁度幕の開き出した舞臺へ、ちつと眼を注いでゐた。

次の幕は前と反對に、人情がかつた舊劇だつた。舞臺には唯屏風の外に、火のともつた行燈が置いてあつた。其處に頬骨の高い年増が一人、猪首の町人と酒を飲んでゐた。年増は時々金切聲に、「若旦那」と相手の町人を呼んだ、さうして、——穂積中佐は舞臺を見ずに、彼自身の記憶に浸り出した。柳盛座の二階の手すりには、十二三の少年が倚りかかつてゐる。舞臺には櫻の釣り枝がある。火影の多い町の書割がある。その中に二錢の團洲と

呼ばれた、和光の不破伴左衛門が、編笠を片手に見得をしてゐる。少年は舞臺に見入つた儘、殆息さへもつかうとしない。彼にもそんな時代があつた。……

「餘興やめ！ 幕を引かんか？ 幕！ 幕！」

將軍の聲は爆彈のやうに、中佐の追憶を打ち砕いた。中佐は舞臺へ眼を返した。舞臺には既に狼狽した少尉が、幕と共に走つてゐた。その間にちらりと屏風の上へ、男女の帯の懸かつてゐるのが見えた。

中佐は思はず苦笑した。「餘興掛も氣が利かなすぎる。男女の相撲さへ禁じてゐる將軍が、濡れ場を黙つて見てゐる筈がない。」——そんな事を考へながら、叱聲の起つた席を見ると、將軍はまだ不機嫌さうに、餘興掛の大主計と、何か問答を重ねてゐた。

その時ふと中佐の耳は、口の悪い亞米利加の武官が、隣に坐つた佛蘭西の武官へ、かう話しかける聲を捉へた。

「將軍Nも樂ぢやない。軍司令官兼檢閲官だから、——」

やつと三幕目が始まつたのは、それから十分の後だつた。今度は木がはひつても、兵卒たちは拍手を送らなかつた。

「可哀さうに。監視されながら、芝居を見てゐるやうだ。」——穂積中佐は憐むやうに、殆ど大きな話聲も立てない、カアキイ服の群を見渡した。

三幕目の舞臺は黒幕の前に、柳の木が二三本立ててあつた。それは何處から伐つて來たか、生々しい實際の葉柳だつた。其處に警部らしい髯だらけの男が、年の若い巡查をいぢめてゐた、穂積中佐は番附の上へ、不審さうに眼を落した。すると番附には「ピストル強盜清水定吉、大川端捕物の場」と書いてあつた。

年の若い巡查は警部が去ると、大仰に天を仰ぎながら、長々と浩歎の獨白を述べた。何でもその意味は長い間、ピストル強盜をつけ廻してゐるが、逮捕出來ないとか云ふのだつた。それから人影でも認めたのか、彼は相手を見つからない爲、一まづ大川の水の中へ姿を隠さうと決心した。さうして後の黒幕の外へ、頭からさきに這ひこんでしまつた。その恰好は鼻頂眼に見ても、大川の水へ没するよりは、蚊帳へはひるのに適當してゐた。

空虚の舞臺には少時の間、波の音を思はせるらしい、大太鼓の音がするだけだつた。と、忽ち一方から、盲人が一人歩いて來た。盲人は杖をつき立てながら、その儘向うへはひらうとする、——その途端に黒幕の外から、さつきの巡查が飛び出して來た。「ピストル強盜、

清水定吉、御用だ！」——彼はさう叫ぶが早いか、いきなり盲人へ躍りかかつた。盲人は咄嗟に身構へをした。と思ふと眼がぱつちりあいた。「憶むらくは眼が小さ過ぎる。」——中佐は微笑を浮かべながら、内心大人氣ない批評を下した。

舞臺では立ち廻りが始まつてゐた。ピストル強盜は渾名通り、ちやんとピストルを用意してゐた。二發、三發、——ピストルは續けさまに火を吐いた。しかし巡查は勇敢に、とうとう偽目くらに繩をかけた。兵卒たちはさすがにどよめいた。が、彼等の間からは、やはり聲一つかからなかつた。

中佐は將軍へ眼をやつた。將軍は今度も熱心に、ぢつと舞臺を眺めてゐた。しかしその顔は以前よりも、遙かに柔しみを湛へてゐた。

其處へ舞臺には一方から、署長とその部下とが駆けつけて來た。が、偽目くらと格闘中、ピストルの弾丸に申つた巡查は、もう昏々と倒れてゐた。署長はすぐに活を入れた。その間に部下はいち早く、ピストル強盜の繩尻を捉へた。その後は署長と巡查との、舊劇めいた愁歎場になつた。署長は昔の名奉行のやうに、何か云ひ遣す事はないかと云ふ。巡查は故郷に母がある、と云ふ。署長は又母の事は心配するな。何かその外にも末期の際に、心

遣しはないかと云ふ。巡查は何も云ふ事はない、ピストル強盗を捉へたのは、この上もない満足だと云ふ。

——その時ひつそりした場内に、三度將軍の聲が響いた。が、今度は叱聲の代りに、深い感激の嘆聲だった。

「偉い奴ぢや。それでこそ日本男兒ぢや。」

穂積中佐はもう一度、そつと將軍へ眼を注いだ。すると日に焼けた將軍の頬には、涙の痕が光つてゐた。「將軍は善人だ。」——中佐は軽い侮蔑の中に、明るい好意をも感じ出した。

その時暮は悠々と、盛んな喝采を浴びながら、舞臺の前に引かれて行つた。穂積中佐はその機會に、ひとり椅子から立ち上ると、會場の外へ歩み去つた。

三十分の後、中佐は紙巻を御へながら、やはり同參謀の中村少佐と、村はづれの空地を歩いてゐた。

「第×師團の餘興は大成功だね。N閣下は非常に喜んでゐられた。」

中村少佐はかう云ふ間も、カイゼル髭の端をひねつてゐた。

「第×師團の餘興？ ああ、あのピストル強盗か？」

「ピストル強盗ばかりぢやない。閣下はあれから餘興掛を呼んで、もう一幕臨時にやれと云はれた。今度は赤垣源藏だったがね。何と云ふのかな、あれは？ 徳利の別れか？」

穂積中佐は微笑した眼に、廣い野原を眺めまはした。もう高粱の青んだ土には、かすかに陽炎が動いてゐた。

「それも亦大成功さ。——」

中村少佐は話し續けた。

「閣下は今夜も七時から、第×師團の餘興掛に、寄席的な事をやらせるさうだぜ。」

「寄席的？ 落語でもやらせるのかね？」

「何、講談ださうだ。水戸黃門諸國めぐり——」

穂積中佐は苦笑した。が、相手は無頓着に、元氣のよい口調を續けて行つた。

「閣下は水戸黃門が好きなのださうだ。わしは人臣としては、水戸黃門と加藤清正とに、最も敬意を拂つてゐる。——そんな事を云つてゐられた。」

穂積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。空には柳の枝の間に、細い雲母雲モモクモが吹かれてゐた。中佐はほつと息を吐いた。

「春だね、いくら満洲でも。」

「内地はもう給を着てゐるだらう。」

中村少佐は東京を思った。料理の上手な細君を思った。小學校へ行つてゐる子供を思った。さうして——かすかに憂鬱になつた。

「向うに杏が咲いてゐる。」

穂積中佐は嬉しさうに、遠い土塀に簇つた、赤い花の塊りを指した。Ecoute-moi, Madeline……—中佐の心には何時の間にか、ユウゴオの歌が浮んでゐた。

四 父と子と

大正七年十月の或夜、中村少將、——當時の軍參謀中村少佐は、西洋風の應接室に、火のついたハヴァナを脚へながら、ぼんやり安樂椅子によりかかつてゐた。

二十年餘りの閑日月は、少將を愛すべき老人にしてゐた。殊に今夜は和服のせみか、禿げ上つた額のあたりや、肉のたるんだ口のまはりには、一層好人物じみた氣色があつた。少將は椅子の背に靠れた儘、ゆつくり周圍を眺め廻した。それから、——急にため息を洩

らした。

室の壁には何處を見ても、西洋の畫の複製らしい、寫眞版の額が懸けてあつた。その或物は窓に倚つた、寂しい少女の肖像だつた。又或物は糸杉の間に、太陽の見える風景だつた。それらは皆電燈の光に、この古めかしい應接室へ、何か妙に薄ら寒い、嚴肅な空氣を與へてゐた。が、その空氣はどう云ふ譯か、少將には愉快でないらしかつた。

無言の何分か過ぎ去つた後、突然少將は室外に、かすかなノックの音を聞いた。

「おはひり。」

その聲と同時に室の中へは、大學の制服を着た青年が一人、背の高い姿を現した。青年は少將の前に立つと、其處にあつた椅子に手をやりながら、ぶつきらぼうにかう云つた。

「何か御用ですか？ お父さん。」

「うん。まあ、其處におかけ。」

青年は素直に腰を下した。

「何です？」

少將は返事をする爲に、青年の胸の金鈕へ、不審らしい眼をやつた。

「今日は？」

「今日は河合の——お父さんは御存知ないでせう。——僕と同じ文科の學生です。——河合の追悼會があつたものですから、今歸つたばかりなのです。」

少將はちよいと頷いた後、濃いハヴァナの煙を吐いた。それからやつと太儀さうに、肝腎の用向きを話し始めた。

「この壁にある畫だね、これはお前が懸け換へたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでした。今朝僕が懸け換へたのです。いけませんか？」

「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思ふ。」

「この中へですか？」

青年は思はず微笑した。

「この中へ懸けてはいけなにかね？」

「いけないと云ふ事ありませんが、——しかしそれは可笑しいでせう。」

「肖像畫はあすこにもあるやうぢやないか？」

少將は爐の上の壁を指した。その壁には額緝の中に、五十何歳かのレムブランドが、悠

悠と少將を見下してゐた。

「あれは別です。N將軍と一しよにはなりません。」

「さうか？ ぢや仕方がない。」

少將は容易に斷念した。が、又葉卷の煙を吐きながら、靜かにかう話を續けた。

「お前は、——と云ふよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思つてゐるね？」

「別にどうも思つてはゐません、まゝ、偉い軍人でせう。」

青年は老いた父の眼に、晩酌の酔を感じてゐた。

「それは偉い軍人だがね、閣下は又實に長者らしい、人懐こい性格も持つてゐられた。……」

少將は殆ど感傷的に、將軍の逸話を話し出した。それは日露戦役後、少將が那須野の別荘に、將軍を訪れた時の事だつた。其の日別荘へ行つて見ると、將軍夫妻は今し方、裏山へ散歩にお出かけになつた、——さう云ふ別荘番の話だつた。少將は案内を知つてゐたから、早速裏山へ出かける事にした。すると二三町行つた所に、綿服を纏つた將軍が、夫人と一しよに佇んでゐた。少將はこの老夫妻と、少時の間立ち話をした。が、將軍は何時までたつても、其處を立ち去らうとしなかつた。「何か此處に用でもおありですか？」——かう少

「今日は？」

「今日は河合の——お父さんは御存知ないでせう。——僕と同じ文科の學生です。——河合の追悼會があつたものですから、今歸つたばかりなのです。」

少將はちよいと頷いた後、濃いハヴァナの煙を吐いた。それからやつと太儀さうに、肝腎の用向きを話し始めた。

「この壁にある畫だね、これはお前が懸け換へたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでした。今朝僕が懸け換へたのです。いけませんか？」

「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思ふ。」

「この中へですか？」

青年は思はず微笑した。

「この中へ懸けてはいけなにかね？」

「いけないと云ふ事ありませんが、——しかしそれは可笑しいでせう。」

「肖像畫はあすこにもあるやうぢやないか？」

少將は爐の上の壁を指した。その壁には額緝の中に、五十何歳かのレムブランドが、悠

悠と少將を見下してゐた。

「あれは別です。N將軍と一しよにはなりません。」

「さうか？ ぢや仕方がない。」

少將は容易に斷念した。が、又葉卷の煙を吐きながら、靜かにかう話を續けた。

「お前は、——と云ふよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思つてゐるね？」

「別にどうも思つてはゐません、まゝ、偉い軍人でせう。」

青年は老いた父の眼に、晩酌の酔を感じてゐた。

少將は殆ど感傷的に、將軍の逸話を話し出した。それは日露戦役後、少將が那須野の別荘に、將軍を訪れた時の事だつた。其の日別荘へ行つて見ると、將軍夫妻は今し方、裏山へ散歩にお出かけになつた、——さう云ふ別荘番の話だつた。少將は案内を知つてゐたから、早速裏山へ出かける事にした。すると二三町行つた所に、綿服を纏つた將軍が、夫人と一しよに佇んでゐた。少將はこの老夫妻と、少時の間立ち話をした。が、將軍は何時までたつても、其處を立ち去らうとしなかつた。「何か此處に用でもおありですか？」——かう少

將が尋ねると、將軍は急に笑ひ出した。「實はね、今妻が憚りへ行きたいと云ふものだから、わしたちについて來た學生たちが、場所を探しに行つてくれた所ぢや。「丁度今頃、——もう路ばたに毬栗などが、轉がつてゐる時分だつた。」

少將は眼を細くした儘、嬉しさうに獨り微笑した。——其處へ色づいた林の中から、勢の好い中學生が、四五人同時に飛び出して來た。彼等は少將に頓着せず、將軍夫妻をとり圍むと、口々に彼等が夫人の爲に、見つけて來た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に來て貰ふやうに、無邪氣な競争さへ始めるのだつた。「ぢやあなた方に籤を引いて貰はう。」——將軍はかう云つてから、もう一度少將に笑顔を見せた。……

「それは罪のない話ですね。だが西洋人には聞かされないな。」

青年も笑はずにはゐられなかつた。

「まあそんな調子でね、十二三の中學生でも、N閣下と云ひさへすれば、叔父さんのやうに懐いてゐたものだ。閣下はお前がたの思ふやうに、決して一介の武弁ぢやない。」

少將は楽しさうに話し終ると、又爐の上のレムブランドを眺めた。

「あれもやはり人格者かい？」

「ええ、偉い畫描きです。」

「N閣下などとはどうだらう？」

青年の顔には當惑の色が浮んだ。

「どうと云つても困りますが、——まあ、N將軍などよりも、僕等に近い氣もちのある人です。」

「閣下のお前がたに遠いと云ふのは？」

「何と云へば好いですか？——まあ、こんな點ですね、たとへば今日追悼會のあつた、河合と云ふ男などは、やはり自殺してゐるのです。が、自殺する前に——」

青年は眞面目に父の顔を見た。

「寫眞をとる餘裕はなかつたやうです。」

今度は機嫌の好い少將の眼に、ちらりと當惑の色が浮んだ。

「寫眞をとつても好いぢやないか？ 最後の記念と云ふ意味もあるし、——」

「誰の爲にですか？」

「誰と云ふ事もないが、——我々始めN閣下の最後の顔は見たいぢやないか？」

羅
生
門

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。唯、所々丹塗にぬりの剝けた、大きな圓柱まろぼしらに、蟋蟀せりふすが一匹とまつてゐる。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠いちめがさや接鳥帽子せきとぼうしが、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。

何故かと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災わざはひがつゞいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。舊記によると、佛像や佛具を打碎ぶちいて、その丹にがついたり、金銀の箔はくがついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪まきの料りょうに賣つてゐたと云ふ事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てゝ顧る者がなかつた。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てゝ行くと云ふ習慣さへ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪がつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉からが何處からか、たくさん集つて來た。晝間見ると、その鴉が何羽となく輪を描かいて、高い鴟尾しゆびのまはりを啼なきながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕燒

けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄くみに來るのである。——尤も今日は、刻限が遅いせゐるか、一羽も見えない。唯、所々、崩れかゝつた、さうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞うんちが、點々と白くこびりついてゐるのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗すすひざらした紺の襖うすの尻しりを据すゑて、右の頬ほに出來た、大きな面皰にきびを氣きにしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようも云ふ當てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ歸る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年、使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、實はこの衰微の小さな餘波あまなみに外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalism に影響した。申まをの刻下りからふり出した雨は、未いまに上あるけしきがない。そこで、下人は、何を措

いても差當り明日の暮しをどうにかしようとして——云はゞどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐたのである。

雨は、羅生門をついで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した臺の先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段を選んでゐる邊はない。選んでみれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて来て、犬のやうに乗せられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然、その後に来る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嘔をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう

火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつてゐた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちよめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風の患のない、人目にかゝる惧のない、一晚樂にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つたからである。すると、幸門の上の樓へ上る、幅の廣い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちよめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持つて面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にある者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其處此處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をか

けた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出来る丈、平にしながら、頸を出来る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の内を覗いて見た。

見ると、樓の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無雑作に棄てゝあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狭いので、數は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあると云ふ事である。勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その死骸は皆、それが、嘗、生きてゐた人間だと云ふ事實さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にならなつてゐる。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に啞の如く黙つてゐた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭氣に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、殆、悉、この男の嗅覺を奪つ

てしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて、其死骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜皮色の着物を著た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その死骸の一つの顔を覗きこむやうに眺めてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れてゐた。舊記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてゐた死骸の首に兩手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の尻をとるやうに、その長い髪の毛を一本づつ抜きはじめた。髪は手に従つて抜けるらしい。

その髪の毛が、一本づつ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しづつ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に對するはげしい憎悪が、少しづつ動いて來た。——いや、この老婆に對すると云つては、語弊があるかも知れない。寧ろ、あらゆる惡に對する反感が、一分毎に強さを増して來たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門

の下でこの男が考へてゐた、餓死をするか盗人になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であらう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる悪であつた。勿論、下人は、さつき迄自分が、盗人になる氣でゐた事などは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云ふ迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたやうに、飛び上つた。
「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、かう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は屍骸の中で、暫、無言のまゝ、つかみ合つた。しかし勝

敗は、はじめから、わかつてゐる。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ押し倒した。丁度、鶏の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を拂つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙つてゐる。兩手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出さうになる程、見開いて、啞のやうに執拗く黙つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。さうしてこの意識は、今までにはしく燃えてゐた憎悪の心を、何時の間にか冷ましてしまつた。後に残つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下しながら、少し聲を柔けてかう云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し方この門の下を通りかゝつた旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようと云ふやうな事はない。唯今時分、この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさへすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ちつとその下人の顔を見守つた。脛の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになつた唇を、何か物でも嚙んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉佛の動いてゐるのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、髪にせうと思つたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはひつて來た。すると、その氣色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、藁のつぶやくやうな聲で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人の髪を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。ぢやが、ここにゐる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりつにつに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ賣りに往んだわ。疫病にかゝつて死ななんだら、今でも賣りに往んでゐた事である。それもよ、この女の賣る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、缺かさず榮料さいりょうに買つ

てゐたさうな。わしは、この女のした事が悪いとは思つてゐぬ。せねば、餓死をするのぢやて、仕方がなくした事である。されば、今又、わしのでした事も悪い事とは思はぬよ。これとてもやはりせねば、餓死をするぢやて、仕方がなくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであらう。」

老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘にをさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面炮を氣にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて來た。それは、さつき門の下で、この男には缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷はなかつたばかりでない。その時のこの男の心もちから云へば、餓死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面炮から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくやうにかう云つた。

「では、己が引剝ひはをしようと思ひまいな。己もさうしなければ、餓死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剝ぎとつた檜皮色の着物をわきにかゝへて、またよく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰へ知らない。

——四年九月——

鼻



禪智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から頤の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はゞ細長い腸詰のやうな物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つてゐるのである。

五十歳を越えた内供は、沙彌の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顔をしてすましてゐる。これは専念に當來の淨土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それより寧ろ、自分で鼻を氣にしてゐると云ふ事を、人に知られるのが厭だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て來るのを何よりも懼れてゐた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鏡の中の飯へとどいてしまふ。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食ふ間中、廣さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貰ふ事にした。しかしかうして飯を食ふと云ふ事は、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容

易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重大理由ではない。内供は實にこの鼻によつて傷けられる自尊心の爲に苦しんだのである。

池の尾の町の者は、かう云ふ鼻をしてゐる禪智内供の爲に、内供の俗でない事を仕合せだと云つた。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中には又、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さへあつた。しかし内供は、自分が僧である爲に、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたとは思つてゐない。内供の自尊心は、妻帯と云ふやうな結果的な事實に左右される爲には、餘りにデリケートに出來てゐたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようとして試みた。

第一に内供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のゐない時に、鏡へ向つて、いろ／＼な角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換へるだけでは、安心が出來なくなつて、頼杖をついたり頤の先へ指をあてがつたりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも満

足する程、鼻が短く見えた事は、是までに唯の一度もない。時によると、苦心すればする程、却て長く見えるやうな氣さへした。内供は、かう云ふ時には、鏡を筥へしまひながら、今更のやうにため息をついて、不承不承に又元の經机へ觀音經をよみに歸るのである。

それから又内供は、絶えず人の鼻を氣にしてゐた。池の尾の寺は、僧供講説などの屢行はれる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て續いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしてゐる。従つてこゝへ出入する僧俗の類も甚多い。内供はかう云ふ人々の顔を根氣よく物色した。一人でも自分のやうな鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはひらない。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣などは、見慣れてゐるだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、唯、鼻を見た。——しかし縫鼻はあつても、内供のやうな鼻は一つも見當らない。その見當らない事が度重なるに従つて、内供の心は次第に又不快になつた。内供が人と話しながら、思はずぶらりと下つてゐる鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤めたのは、全くこの不快に動かされての所爲である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめて

も幾分の心やりにしようと思つた事がある。けれども、目蓮や、舍利佛の鼻が長かつたとは、どの經文にも書いてない。勿論龍樹や馬鳴も、人並の鼻を備へた菩薩である。内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かつたと云ふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位自分は心細くなるだらうと思つた。

内供がかう云ふ消極的な苦心をしながらも、一方では又、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざこゝに云ふ迄もない。内供はこの方面でも殆、出来るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある、鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと脣の上にはぶら下げてゐるではないか。

所が或年の秋、内供は用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己の醫者から長い鼻を短くする法を教はつてゐた。その醫者と云ふのは、もと震旦から渡つて來た男で、當時は長樂寺の供僧になつてゐたのである。

内供は、いつものやうに、鼻などは氣にかけないと云ふ風をして、わざとその法もすぐによつて見ようとは云はずにゐた。さうして一方では、氣輕な口調で、食事の度毎に、弟子の手数をかけるのが、心苦しいと云ふやうな事を云つた。内心では勿論弟子の僧が、自

分を説伏せて、この法を試みさせるのを待つてゐたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに對する反感よりは、内供のさう云ふ策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであらう。弟子の僧は、内供の豫期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。さして、内供自身も亦、その豫期通り、結局この熱心な勸告に聽従する事になつた。

その法と云ふのは、唯、湯で鼻を茹で、その鼻を人に踏ませると云ふ、極めて簡単なものであつた。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしてゐる。そこで弟子の僧は、指も入れないやうな熱い湯を、すぐに提ひきに入れて、湯屋か、波んで來た。しかしぢかにこの提ひきへ鼻を入れるとなると、湯氣に吹かれて顔を火傷やけどを懼がある。そこで折敷せしきへ穴をあけて、それを提ひきの蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云つた。

——もう茹うたつた時分でござらう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは氣がつかないだらうと思つた

からである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食つたやうにむづ痒い。

弟子の僧は、内供が折敷せしきの穴から鼻をぬくと、そのまだ湯氣の立つてゐる鼻を、兩足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのぼしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見てゐるのである。弟子の僧は、時々氣の毒さうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云つた。

——痛うはござらぬかな。醫師は責めて踏めと申したで。ぢやが、痛うはござらぬかな。

内供は、首を振つて、痛くないと云ふ意味を示さうとした。所が鼻を踏まれてゐるので思ふやうに首が動かない。そこで、上眼を使つて、弟子の僧の足に鞭むちのきかれてゐるのを眺めながら、腹を立てたやうな聲で、

——痛うはないて。

と答へた。實際鼻はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て氣もちのいゝ位だつたのである。

しばらく踏んでゐると、やがて、粟粒のやうなものが、鼻へ出來はじめた。云はば毛をむしつた小鳥をそつくり丸炙まるやきにしたやうな形である。弟子の僧は之を見ると、足を止めて

獨り言のやうにかう云つた。

——之を鑷子でぬけと申す事でござつた。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない譯ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のやうに取扱ふのが、不愉快に思はれたからである。内供は、信用しない醫者の手術をうける患者のやうな顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めてゐた。脂は、鳥の羽の莖のやうな形をして、四分ばかりの長さになぬけるのである。

やがて之が一通りすむと、弟子の僧は、ほつと一息ついたやうな顔をして

——もう一度、之を茹でればようござる。

と云つた。

内供は矢張、八の字をよせたまゝ不服らしい顔をして、弟子の僧の云ふなりになつてゐた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、何時になく短くなつてゐる。これではあたりまへの鍵鼻と大した變りはない。内供はその短くなつた鼻を撫でながら、弟子の僧の

出してくれる鏡を、極りが悪るさうにおつおつ覗いて見た。

鼻は——あの頤の下まで下つてゐた鼻は、殆、嘘のやうに萎縮して、今は僅に上唇の上で意氣地なく残喘を保つてゐる。所々まだらに赤くなつてゐるのは、恐らく踏まれた時の痕であらう。かうなれば、もう誰も晒ふものはないのにちがひない。——鏡の中にある内供の顔は、顔の外にある内供の顔を見て、満足さうに眼をしばたゝいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻が又長くなりはしないかと云ふ不安があつた。そこで内供は誦經する時にも、食事をする時にも、暇さへあれば手を出して、そつと鼻の先にさはつて見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まつてゐるだけで、格別それより下へぶら下つて来る氣色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供は先、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書寫の功を積んだ時のやうな、のびのびした氣分になつた。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事實を發見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しさうな顔をして、話も碌々せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めてゐた事である。そのみならず、嘗、内供の鼻を粥の中へ落した事

のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらへてゐたが、とうとうこらへ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまつた。用を云ひつかつた下法師たちが、面と向つてゐる間だけは、憤んで聞いてゐても、内供が後さへ向けば、すぐにくすくす笑ひ出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は始、之を自分の顔がはりがしたせゐだと解釋した。しかしどうもこの解釋だけでは十分に説明がつかないやうである。——勿論、中童子や下法師が晒ふ原因は、そこにあるのにちがひない。けれども同じ晒ふにしても、鼻の長かつた昔とは、晒ふのにとことなく容子がちがふ。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えるると云へば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのやうにつつけとは晒はなんだて。

内供は、誦しかけた經文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々かう咳く事があつた。愛すべき内供は、さう云ふ時になると、必ぼんやり、傍にかけた普賢の畫像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」つぶつぶとこんでしまふのである。——内供には、遺憾ながらこの問

に答を與へる明が缺けてゐた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来る、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して云へば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいやうな氣にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に對して抱くやうな事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

そこで内供は日毎に機嫌が悪くなつた。二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。しまひには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさへ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきく程になつた。殊に内供を忿らせたのは、例の悪戯な中童子である。或日、けたたましく犬の吠える聲がするので、内供が何氣なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまはして、毛の長い、瘦せた老犬を逐ひまはしてゐる。それも唯、逐ひまはしてゐるのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と唯ながら逐ひまはして

ゐるのである。内供は、中童子の手からその木の片をひつたくつて、したゝかその顔を打つた。木の片は以前の鼻持上げの木だったのである。

内供はなまじひに、鼻の短くなつたのが、反て恨めしくなつた。

すると或夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさい程枕に通つて来た。その上、寒さもめつきり加はつたので、老年の内供は寝つかうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしてゐると、ふと鼻が何時になく、むづ痒いのに気がついた。手をあてて見ると少し水気が来たやうにむくんでゐる。どうやらそこだけ、熱さへもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、佛前に香華を供へるやうな恭しい手つきで、鼻を押へながら、かう呟いた。

翌朝、内供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたやうに明い。塔の屋根には霜が下りてゐるせみであらう。まだうすい朝日に、丸輪がまばゆく光つてゐる。禪智内供は、葷を上げた終に立つて、深く息をすひこんだ。

殆、忘れようとしてゐた或感覚が、再、内供に歸つて来たのはこの時である。

内供は慌てゝ鼻へ手をやつた。手にさはるものは、昨夜の短い鼻ではない。上層の上から願の下まで、五六寸あまりもぶら下つてゐる、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなつたのを知つた。さうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれした心もちが、どこからともなく歸つて来るのを感じた。

——かうなれば、もう誰も晒ふものはないにちがひない。

内供は心の中でかう自分に囁いた、長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。

——五年一月——

猿

私が、遠洋航海をすませて、やつと半玉（軍艦では、候補生の事をかう云ふのです）の年期も終らうと云ふ時でした。私の乗つてゐたAが、横須賀へ入港してから、三日目の午後、彼是三時頃でしたらう。勢よく例の上陸員整列の喇叭が鳴つたのです。確、右舷が上陸する順番になつてゐたと思ひますが、それが皆、上甲板へ整列したと思ふと、今度は、突然、總員集合の喇叭が鳴りました。勿論、唯事ではありません。何にも事情を知らない私たちは船口を上りながら、互に「どうしたのだらう」と云ひ交はしました。

さて、總員が集合して見ると、副長がかう云ふのです。「……本艦内で、近來、盜難に罹つた者が、二三ある。殊に、昨日、町の時計屋が來た際にも、銀側の懐中時計が二個、紛失したと云ふ事であるから、今日はこれから、總員の身體検査を行ひ、同時に所持品の検査も行ふ事にする。……」大體、こんな意味だつたと思ひます。時計屋の一件は、初耳ですが、盜難に罹つた者があるのは、僕たちも知つてゐました。何でも、兵曹が一人に水兵が二人で、皆、金をとられたと云ふ事です。

身體検査ですから、勿論、皆、裸にさせられるのですが、幸、十月の初で港内に浮んでゐる赤い浮標に日がかんかん照りつけるのを見ると、まだ、夏らしい氣がする時分なので、

これはさう大して苦にもならなかつたやうです。が、弱つたのは、上陸早々、遊びに行く氣でゐた連中で、検査をされると、ポケットから春畫が出る、サツクが出る、と云ふ騒ぎでせう。顔を赤くして、もじもじしたつて、追付きません。何でも、二三人は、士官に擧られたやうでした。

何しろ、總員六百人もあるので、一通り検査をするにしても、手間がとれます。奇觀と云へば、まああの位、奇觀はありますまい。六百人の人間が皆、裸で、上甲板一杯に、並んでゐるので、その中でも、顔や手首のまつ黒なのが、機關兵で、この連中は今度の盜難に、一時嫌疑をかけられた事があるものですから、猿股までぬいで、檢べるのならばどこでも檢へてくれと云ふ恐しいやうな權幕です。

上甲板で、かう云ふ騒ぎが、始まつてゐる間に、中甲板や下甲板では、所持品の検査をやり出しました。船口にはのこらず、候補生が配置してありますから、上甲板の連中は勿論下へは一足でもはひれません。私は、丁度、その中下甲板の検査をする役に當つたので、外の仲間と一しよに、兵員の衣囊やら手箱やらを検査して歩きました。こんな事をするのは軍艦に乗つてから、まだ始めてでしたが、ビームの裏を探すとか衣囊をのせてある棚の

奥をかきまはすとか、思つたより、面倒な仕事です。その中に、やつと、私と同じ候補生の牧田と云ふ男が、賊品を見つけました。時計も金も一つになつて、奈良島と云ふ信號兵の帽子の箱の中に、あつたのです。その外にまだ給仕がなくなしたと云ふ、青貝の柄のナイフも、はひつてゐたと云ふ事でした。

そこで、「解散」から、すぐに「信號兵集れ」と云ふ事になりました。外の連中は悦んだの、悦ばないのではありません。殊に、機關兵などは、前に疑はれたと云ふ廉があるものですか、大へんな嬉しがりやうでした。――所が集つた信號兵を見ると、奈良島がゐません。

僕は、まだ無經驗だつたので、さう云ふ事は、まるで知りませんでした。軍艦では賊品が出て、犯人の出ないと云ふ事が、時々あるのださうです。勿論、自殺をするのです。十中八九は、石炭庫の中で首を縊るので、投身するのは、殆、ありません。尤も一度、私の軍艦では、ナイフで腹を切つたのがゐたさうですが、これは死に切れない中に、發見されて命だけはとりとめたと云ふ事でした。

さう云ふ事があるものですから、奈良島が見えないと云ふと、將校連も皆流石に、ぎよつとしたやうでした。殊に、今でも眼についてゐるのは、副長の慌て方で、この前の戦争

の時には、随分、驕名を馳せた人ださうですが、その顔色を變へて、心配した事と云つたら、はた眼にも笑止な位です。私たちは皆、それを見ては、互に輕蔑の眼を交はしてゐました。ふだん精神修養の何のと云ふ辭に、あの狼狽のしかたはどうだと云ふ、腹があつたのです。

そこで、すぐに、副長の命令で、艦内の搜索が始まりました。さうなると一種の愉快な興奮に驅られるのは、私一人に限つた事ではないでせう。火事を見にゆく彌次馬の心もち――丁度、あんなものです。巡查が犯人を逮捕に行くとなると、向うが抵抗するかも知れないと云ふ不安があるでせうが、軍艦の中ではそんな事は、萬々ばく又ありません。殊に、私たちと水兵との間には、上下の區別と云ふものが、嚴として、――軍人になつて見なければ、わからない程、嚴としてありますから、それが、非常な強みです。私は、殆、踊躍して、艙口ハッチを駈け下りました。

丁度、その時、私と一しよに、下へ來た連中の中に、牧田がゐましたが、これも、面白くつてたまらないと云ふ風で、後から、私の肩をたたきながら

「おい、猿をつかまへた時の事を思出すな。」と云ふのです。

「うん、今日の猿は、あいつ程敏捷でないから、大丈夫だ。」

「そんなに高を括つてみると、逃げられるぞ。」

「なに、逃げたつて、猿は猿だ。」

こんな冗談を云ひながら、下へ下りました。

この猿と云ふのは、遠洋航海で、オオストラリアへ行つた時に、ブリスベインで、砲術長が、誰かから貰つて来た猿の事です。それが、航海中、ウイルヘルムス・ハフエンへ入港する二日前に、艦長の時計を持つたなり、どこかへ行つてしまつたので、軍艦中大騒ぎになりました。一つは、永の航海で、無聊に苦んでゐたと云ふ事もあるのですが、當の砲術長はもとより、私たち總出で、事業服のまま、下は機關室から上は砲塔まで、さがして歩く——一通りの混雜ではありません。それに、外の連中の貰つたり、買つたりした動物が澤山あるので、私たちが駆けて歩くと、犬が足にからまるやら、ベリカンが啼き出すやら、ロオブに吊つてある籠の中で、鸚哥が、氣のちがつたやうに、羽搏きをするやら、まるで、曲馬小屋で、火事でも始まつたやうな體裁です。その中に、猿の奴め、どこをどうしたか、急に上甲板へ出て来て、時計を持つたまま、いきなりマストへ、駆け上らうとし

ました。丁度そこには、水兵が二三人仕事をしてゐたので勿論、逃がしつこはありません。すぐに、一人が、頸すぢをつかまへて、難なく、手捕りにしてしまひました。時計も、硝子がこはれた丈で、大した損害もなくすんだのです。あとで猿は砲術長の發案で、滿二日、絶食の懲罰をうけたのですが、滑稽ではありませんか、その期限が切れない中に、砲術長自身、罰則を破つて、猿に、人蔘や芋を、やつてしまひました。さうして、「しよげてゐるのを見ると、猿にしても、可哀さうだからな」と、かう云ふのです。——これは、餘事です。が、實際奈良島をさがして歩く私たちの心もちは、この猿を追ひかけた時の心もちと、可成よく似てゐました。

私は、その時、一番先に、下甲板へ下りました。御承知でせうが、下甲板は、何時もいやにうす暗いものです。その中で、磨いた金具や、ペンキを塗つた鐵板が、あちらこちらに、ぼんやりと、光つてゐる。——何だか妙に息がつまるやうな氣がして、仕方がありません。そのうす暗い中を、石炭庫の方へ二足三足、歩いたと思ふと、私は、もう少しで、聲を出して、叫びさうになりました。——石炭庫の積入口に、人間の上半身が出てゐたか

た所なのでせう。こつちからは、紺の水兵服の肩と、帽子とに遮られて、顔は誰ともわかりません、それに、光が足りないのです、唯その上半身の黒くうき出してゐるのが、見えるだけです。が、直覺的に、私は、それを、奈良島だと思ひました。さうだとすれば、勿論、自殺をするつもりで、石炭庫へはひらうと云ふのです。

私は、異常な興奮を感じました。體中の血が躍るやうな、何とも云ひやうのない、愉快な昂奮です。銃を手にして、待つてゐた獵師が、獲物の來るのを見た時のやうな心もちでも、云ひませうか。私は、殆、夢中で、その男にとびかかりました。さうして、獵犬よりもすばやく、両手で、その男の肩をしつかり、上からおさへました。

「奈良島。」

叱るとも、罵るともつかずに、かう云つた私の聲は、妙に上ずつて、顫へてゐました。それが、實際、犯人の奈良島だつた事は云ふまでもありません。

「……………」

奈良島は私の手をふり離すでもなく、上半身を積入口から出したまま、靜に、私の顔を見上げました。「靜に」と云つたのでは、云ひ足りません。ある丈の力を出しきつて、しか

も靜でなければならぬ「靜に」です。餘裕のない、せつばつまつた、云はば半吹きに折られた帆船が、風のすぎた後で、僅に残つてゐる力をたよりに、元の位置に返らうとする、あの止むを得ない「靜に」です。私は、無意識ながら豫期してゐた抵抗がなかつたので、或不満に似た感情を抱きながら、しかもその爲に、一層、いらいらした腹立たしさを感じながら、黙つて、その「靜に」もたげた顔を見下しました。

私は、あんな顔を、二度と見た事はありません。悪魔でも、一目見たら、泣くかと思ふやうな顔なのです。かう云つても、實際、それを見ないあなたには、とても、想像がつかずまい。私は、あなたに、あの涙ぐんでゐる眼を、お話しする事は、出来るつもりです。あの急に不隨意筋に變つたやうな口角の筋肉の痙攣も、或は、察して頂く事が出来るかも知れません。それから、あの汗ばんだ、色の悪い顔も、それだけなら、容易に、説明が出来ませう。が、それらのすべてから来る、恐しい表情は、どんな小説家も、書く事は出来ません。私は、小説をお書きになるあなたの前でも、安心して、これだけの事は、云ひきれません。私はその表情が、私の心にある何物かを、稻妻のやうに、たゞき壊したのを感じました、それ程、この信號兵の顔が、私に、強いショックを與へたのです。

「貴様は何をしようとしてゐるのだ。」

私は、機械的にかう云ひました。すると、その「貴様」が、氣のせゐるか、私自身を指してゐる様に、聞えるのです。「貴様は何をしようとしてゐるのだ。」——かう訊ねられたら、私は何と答へる事が出来るのでせう。「己は、この男を罪人にしようとしてゐるのだ。」誰が安んじて、さう答へられます。誰が、この顔を見てそんな眞似が出来ます。かう書くと、長い間の事のやうですが、實際は、殆ど一刹那の中に、こんな自責が、私の心に閃きました。丁度、その時です。「面目ございません」——かう云ふ語が、かすかながら鋭く、私の耳にはひつたのは。

あなたなら、私自身の心が、私に云つたやうに聞えたとしても、形容なさるのでせう。私は、唯、その語が、針を打つたやうに、私の神経へひびくのを感じました。まつたく、その時の私の心もちは、奈良島と一しよに「面目ございません」と云ひながら、私たあより大きい、何物かの前に首がさげたかつたのです。私は、いつか、奈良島の肩をおさへてゐた手をはなして、私自身が捕へられた犯人のやうに、ぼんやり石炭庫の前に立つてゐました。

後は、お話しせずとも、大概お察しがつきませう。奈良島は、その日一日禁錮室に監禁されて、翌日、浦賀の海軍監獄へ送られました。これは、あんまりお話ししたくない事ですが、あすこでは、囚人に、よく「彈丸運び」と云ふ事をやらせるのです。八尺程の距離を置いた臺から臺へ、五貫目ばかりの鐵の丸を、繰返し繰返し、置き換へさせるのですが、何が苦しいと云つて、あの位、囚人に苦しいものはありますまい。いつか、拜借したドストエフスキイの「死人の家」の中にも、「甲のバケツから、乙のバケツへ水をあけて、その水を又、甲のバケツへあけると云ふやうに、無用な仕事を何度となく反復させると、その囚人は必、自殺する。」——こんな事が、書いてあつたかと思ひます。それを、實際、あすこの囚人はやつてゐるのですから、自殺をするものなのなのが、寧ろ、不思議な位でせう。そこへ行つたのです、私の取押さへた、あの信號兵は、雀斑のある、背の低い、氣の弱さうな、おとなしい男でしたが……。

その日、私は、外の候補生仲間と、櫛干ハンドレユルによりかゝつて、日の暮れかゝる港を見つて、例の牧田が私の隣へ来て、「猿を生捕つたのは、大手柄だな」と、ひやかすやうに、云ひました。大方、私が、内心得意でもあると思つたのでせう。

「奈良島は人間だ。猿ぢやあない。」

私は、つゝけんどんに、かう云つて、ふいとハンドレエルを離れてしまひました。外の連中は、不思議かつたのに違ひありません。牧田と私とは、兵學校以來の親友で、喧嘩一つした事がないのですから。

私は、獨りで、上甲板を、艦尾から艦首へ歩きながら、奈良島の生死を氣づかつた副長の狼狽した容子を、なつかしく思ひ返しました。私たちがあの信號兵を、猿扱ひにしてゐた時でも、副長だけは、同じ人間らしい同情を持つてゐたのです。それを、輕蔑した私たちの莫迦さかげんは、全くお話しにも何にもなりません。私は、妙にきまりが悪くなつて、頭を下げました。さうして、出来るだけ、靴の音がしないやうに、暗くなりかけた甲板を、又艦首から艦尾へ、ひき返しました。禁錮室にゐる奈良島に、私たちの勢のいゝ靴の音を聞かせるのが、すまないやうな氣がしたからです。

奈良島が盗みをしたのは、やはり女からだと言ふ事でした。刑期は、どの位だか、知りません。兎に角、少くとも、何ヶ月かは、暗い所へはひつてゐたのでせう。猿は懲罰をゆるされても、人間はゆるされせんから。

—五年八月—

運

目のあらい簾が、入口にぶらさげであるので、往來の容子を仕事場にゐても、よく見えた。清水へ通ふ往來は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓かねつをかけた法師が通る。壺装束をした女が通る。その後からは、めづらしく、黄牛おうごうに曳かせた網代車あじろぐるまが通つた。それが皆、疎まよな蒲の簾の目を、右からも左からも、來たかと思ふと、通りぬけてしまふ。その中で變らないのは、午後の日が暖に春はるを炙あつてゐる、狭い往來の土の色ばかりである。

その人の往來を、仕事場の中から、何と云ふ事もなく眺めてゐた、一人の青侍が、この時、ふと思ひついたやうに、おとしの陶器師たわぎものつくりへ聲をかけた。

「不相變、觀音様へ參詣する人が多いやうだね。」

「左様でございます。」

陶器師たわぎものつくりは、仕事に氣をとられてゐたせゐか、少し迷惑さうに、かう答へた。が、これは眼の小さい、鼻の上を向いた、何處かへうきんな所のある老人で、顔つきにも容子にも、惡氣らしいものは、微塵もない。著てゐるのは、麻の帷子であらう。それに葵あひえた揉烏帽子もみうしをかけたのが、此頃評判の高い鳥羽僧正の繪卷の中の人物を見るやうである。

「私も一つ、日參でもして見ようか。かう、うだが上らなくつちや、やりきれない。」

「御冗談で。」

「なに、これで善い運が授かるとなれば、私だつて、信心をするよ。日參をしたつて、參籠さんろうをしたつて、さうとすれば、安いものだからね。つまり、神佛かみほとけを相手に、一商賣いちしょうばいをするやうなものだ。」

青侍は、年相應な上調子なものの言ひをして、下唇を舐めながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。——竹藪たけくさを後にして建てた、藁葺わらづききのあばら家あばらだから、中は鼻がつかへる程狭い。が、簾すだれの外の往來が、目まぐるしく動くのに引換へて、此處では、甕へいしでも瓶子びんでも、皆みな緒いとちやけた土器かひやくの肌をのどかな春風に吹かせながら、百年も昔からさうしてゐたやうに、ひっそりかんと静まつてゐる。どうやらこの家の棟むねばかりは、燕つばきさへも巢ねを食はないらしい。……

翁おきなが返事をしないので、青侍は又語を繼いだ。

「お爺さんなんぞも、この年までには、随分いろんな事を見たり聞いたりしたらうね。どうだい。觀音様は、ほんとうに運を授けて下さるものかね。」

「左様でございます。昔は折々、そんな事もあつたやうに聞いて居りますが。」

「どんな事があつたわ。」

「どんな事と云つて、さう一口には申せませんが。——しかし、貴方がたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもございませぬ。」

「可哀さうに、これでも少しは信心氣のある男なんだぜ。愈々運が授かるとなれば、明日にも——」

「信心氣でございませぬかな。商賣氣でございませぬかな。」

翁は、眦に皺をよせて笑つた。捏ねてゐた土が、壺の形かたになつたので、やつと氣が樂になつたと云ふ調子である。

「神佛のお考へなどと申すものは、貴方がた位のお年では、中々わからないものでございませぬよ。」

「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くんであらね。」

「いやさ。神佛が運をお授けになる、ならないと云ふ事ぢやございませぬ。そのお授けになる運の善し悪しと云ふ事が。」

「だつて、授けて貰へばわかるぢやないか。善い運だとか、悪い運だとか。」

「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねませうて。」

「私には運の善し悪しより、さう云ふ理窟の方が、わからなさうだね。」

日が傾き出したのであらう。さつきから見ると、往來へ落ちる物の影が、心もち長くなつた。その長い影をひきながら、頭に桶をのせた物賣りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産らしい櫻の枝を持つてゐた。

「今、西の市で、積麻あまの鬘むすを出してゐる女なぞもさうでございませぬが。」

「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつてゐるぢやないか。」

二人は、暫しばらくの間、黙つた。青侍は、爪で頤のひげを抜きながら、ぼんやり往來を眺めてゐる。貝殻のやうに白く光るのは、大方さつきの櫻の花がこぼれたのであらう。

「話さないかね。お爺さん。」

やがて、眠むさうな聲で、青侍が云つた。

「では、御免を蒙つて、一つお話し申ませうか。又、何時いつもの昔話でございませぬが。」

かう前置きをして、陶器師たみもつくりの翁は、徐に話し出した。日の長い短いも知らない人でなくては、話せないやうな、悠長な口ぶりで話し出したのである。

「もう彼是かれ三四十年前になりませう。あの女がまだ娘の時分に、この清水の観音様へ、願をかけた事がございました。どうぞ一生安樂に暮せますようにと申しましたな。何しろ、その時分は、あの女もたつた一人のおふくろに死別れた後で、それこそ日々の暮しにも差支へるやうな身の上でございましたから、さう云ふ願をかけたのも、滿更無理はございません。」

「死んだおふくろと申すのは、もと白朱社の巫女で、一しきりは大さう流行はやつたものでございますが、狐を使ふと云ふ噂を立てられてからは、めつきり人も來なくなつてしまつたやうでございます。これが又、白あばたの、年に似合はず水々しい、大がらな婆さんでございますましてな、何さま、あの容子ぢや、狐どころか男でも……」

「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺ひたいね。」

「いや、これは御挨拶で。——、そのおふくろが死んだので、後は娘一人の瘦せ腕せうせうでんでございますから、いくらかせいでも、暮しの立てられやうがございませぬ。そこで、あの容貌まうがうのよい、利發者の娘が、お籠りをするのにも、襤褸ついで故に、あたりへ氣かひけると云ふ始末でございます。」

「へえ、そんなに好い女だつたかい。」

「左様でございます。氣だてと云ひ、顔と云ひ、手前の欲目よくめでは、先、どこへ出して、恥しくないと思ひましたかな。」

「惜しい事に、昔さね。」

青侍は、色のさめた藍の水干の袖口を、ちよいとひつぱりながら、こんな事を云ふ、翁は、笑聲を鼻から抜いて、又ゆつくり話しつづけた。後の竹藪では、頻に鶯が啼いてゐる。

「それが、三七日の間、お籠りをして、今日が満願と云ふ夜に、ふと夢を見ました。何でも、同じ御堂に詣つてゐた連中の中に、尙せむし儂の坊主が一人ゐて、そいつが何か陀羅尼のやうなものを、くどくど誦よみしてゐたさうでございます。大方それが、氣になつたせゐでございますせう。うとうと眠氣がさして來ても、その聲ばかりは、どうしても耳をはなれませぬ。とんと、縁の下で蚯蚓でも鳴いてるやうな心もちで——すると、その聲が、何時の間にやら人間の語ことばになつて、『ここから歸る路で、そなたに云ひよるが男ある。その男の云ふ事を聞くがよい。』と、かう聞えると申すのでございますな。」

「はつと思つて、眼がさめると、坊主はやつぱり陀羅尼三昧でございます。が、何と云つ

てゐるのだが、いくら耳を澄ましても、わかりませぬ。その時、何気なく、ひよいと向うを見ると、常夜燈のぼんやりした明りで、観音様のお顔が見えました。日頃拜みなれた、端嚴微妙のお顔でございますが、それを見ると、不思議にも又耳もとで、『その男の云ふ事を聞くがよい』と、誰だか云ふやうな気がしたさうでございます。そこで、狼はそれを観音様のお告だと、一圖に思ひこんでしまひましたげな。」

「はてな。」

「さて、夜がふけてから、お寺を出て、だらだら下りの坂路を、五條へくだらうとしますと、案の定、後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でございましたが、生憎の闇で、相手の男の顔も見えなければ、着てゐる物などは、猶の事わかりませぬ。唯、ふり離さうとする拍子に、手が向うの口髭にさはりました。いやはや、とんだ時が、満願の夜に當つたものでございます。」

「その上、相手は、名を訊かれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。唯、云ふ事を聞くと云ふばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるやうにして、つれて行きます。泣かうにも、喚かうにも、まるで人通りのない時分なのだか

ら、仕方がございませぬ。」

「ははあ、それから。」

「それから、とうとう八坂寺の塔の中へ、つれこまれて、その晩は其處ですごしたさうでございます。——いや、その邊の事なら、何も年よりの手前などが、わざわざ申し上げるまでもございますまい。」

翁は、又眦に皺をよせて、笑つた。往來の影は、愈々長くなつたらしい、吹くともなく渡る風のせるであらう、其處此處に散つてゐる櫻の花も、何時の間にかこつちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、黠々と白い色をこぼしてゐる。

「冗談云つちやいけない。」

青侍は、思ひ出したやうに、頤のひげを抜き抜き、かう云つた。

「それで、もうおしまひかい。」

「これだけなら、何もわざわざお話し申すがものにはございませぬ。」翁は、やはり聲をいちりながら、「夜があけると、その男が、かうなるのも大方宿世の縁だらうから、とても事に夫婦になつてくれと申したさうでございます。」

狼

「成程。」

「夢のお告げでもないなら兎も角、娘は、観音様の思召し通りになるのだと思つたものでございますから、とうとう首を豎にふりました。さて形ばかりの益事をすませると、先、當座の用にと云つて、塔の奥から出して来てくれたのが綾を十疋に絹を十疋でございます。——この眞似ばかりは、いくら貴方にもちとむづかしいかも存じませんな。」

青侍は、にやにや笑ふばかりで、返事をしない。驚も、もう啼かなくなつた。

「やがて、男は、日の暮に歸ると云つて、娘一人を留守居に、慌しく何處かへ出て参りました。その後の淋しさは、又一倍でございます。いくら利發者でも、かうなると、流石に心細くなるのでございませう。そこで、心晴らしに、何氣なく塔の奥へ行つて見ると、どうでございませう、綾は絹は愚な事、珠玉とか砂金とか云ふ金目の物が、皮匣に幾つとなく、並べてあると云ふぢやございませぬか。これにはあゝ云ふ氣丈な娘でも、思はず肚胸をついたさうでございます。」

「物にもよりますが、こんな財物を持つてゐるからは、もう疑はございませぬ。引剣でなければ、物盗りでございます。——さう思ふと、今までは唯、さびしいだけだつたのが、

急に、怖いのも手傳つて、何だか片時も此處にかうしては、ゐられないやうな氣になりました。何さま、悪く放免の手にでもかからうものなら、どんな目に遇ふかも知れませぬ。」

「そこで、逃げ場をさがす氣で、急いで戸口の方へ引返さうと致しますと、誰だか、皮匣の後から、しはがれた聲で呼びとめました。何しろ、人はゐないとばかり思つてゐた所でございませぬから、驚いたの驚かないのぢやございませぬ。見ると、人間とも海鼠ともつかないやうなものが、砂金の袋を積んだ中に、圓くなつて、坐つて居ります。——これが目くされの、皺だらけの、腰のまがつた、背の低い、六十ばかりの尼法師でございました。しかも娘の思惑を知つてか、知らないでか、膝で前へのり出しながら、見かけによらない猫撫聲で、初對面の挨拶をするのでございます。」

「こつちは、それ所の騒ぎではないのでございますが、何しろ逃げようと云ふ巧みをけどられなどしては大變だと思つたので、しぶしぶ皮匣の上に肘をつきながら心にもない世間話をはじめました。どうも話の容子では、この婆さんが、今までのあの男の炊女か何かつとめてゐたらしいのでございます。が、男の商賣の事になると、妙に一口も話させぬ。それさへ、娘の方では、氣になるのに、その尼が又、少し耳が遠いと來てゐるものでござい

ますから、一つ話を何度となく、云ひ直したり聞き直したりするので、こつちはもう泣き出した程、気がおちれます。――

「そんな事が、彼是午^{かれはひる}までつよいたでございませう。すると、やれ清水の櫻が咲いたの、やれ五條の橋普請が出来たのと云つてゐる中に、幸年^{さいはひ}の加減か、この婆さんが、そろそろ居睡りをはじめました。一つは娘の返答が、はかばかしくなつたせもあるものでございませう。そこで、娘は、折を計つて、相手の寢息を窺ひながら、そつと入口まで這つて行つて、戸を細目にあけて見ました。外にも、いゝ案配に、人のけはひはございませぬ。――

「此處でそのまゝ、逃げ出してしまへば、何事もなかつたのでございませうが、ふと今朝貰つた綾と絹との事を思ひ出したので、それを取りに、又そつと皮匣の所まで歸つて参りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまづいて、思はず手が婆さんの膝にさはつたから、たまりませぬ。尼の奴^{やつ}め驚いて眼をさますと、暫^{しばらく}は唯、あつけにとられて、ゐたやうでございませぬ。急に氣ちがひのやうになつて、娘の足にかじりつきました。さうして、半分泣き聲で、早口に何かしやべり立っています。切れ切れに、語^{ことば}が耳へはひる所では、萬一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇ふかも知れないと、かう云つてゐるら

しいのでございませぬ。が、こつちも此處にゐては命にかゝはると云ふ時でございませうから、元よりそんな事に耳をかす譯がございませぬ。そこで、とうとう、女同士のつかみ合がはじまりました。

「打つ。蹴る。砂金の袋をなげつける。――梁に巢を食つた鼠も、落ちさうな騒ぎでございませぬ。それに、かうなると、死物狂ひだけに、婆さんの力も、莫迦には出来ませぬ。が、そこは年のちがひでございませう。間もなく、娘が、綾と絹とを小脇にかゝへて、息を切らしながら、塔の戸口をこつそり、忍び出た時には、尼はもう、口もきかないやうになつて居りました。これは、後で聞いたのでございませうが、死骸は、鼻から血を少し出して、頭から砂金を浴びせられたまま、落暗い隅の方に、仰向けになつて、臥^ねてゐたさうでございませぬ。

「こつちは八坂寺を出ると、町家の多い所は、流石に氣がさしたと見えて、五條京極邊の知人の家をたづねました。この知人と云ふのも、その日暮しの貧乏人なのでございませうが、絹の一疋もやつたからでございませう、湯を沸かすやら、粥を煮るやら、いろ／＼經營してくれなさうでございませう。そこで、娘も漸く、ほつと一息つく事が出来ました。」

「私も、やつと安心したよ。」

青侍は、帯にはさんでゐた扇をぬいて、簾の外の日を眺めながら、それを器用に、ぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁が五六人、騒々しく笑ひ興しながら、通りすぎたが、影はまだ往來に残つてゐる。……

「ぢやそれで愈々けりがついたらと云ふ譯だね。」

「所が」翁は大仰に首を振つて、「その知人の家に居りますと、急に往來の人通りがはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵り合ふ聲が聞えます。何しろ、後暗い體ですから、娘は又、胸を痛めました。あの物盗りが仕返ししにでも來たものか、さもなければ、檢非違使の追手がかかりでもしたものか、——さう思ふともう、おちおち、粥を啜つても居られませぬ。」

「成程。」

「そこで、戸の隙間から、そつと外を覗いて見ると、見物の男女の中を、放免が五六人、それに看脅長かどろぎが一人ついて、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれて、細にかかつた男が一人、所々裂けた水干を着て烏帽子もかぶらず、曳かれて參ります。どう

も物盗りを捕へて、これからその住家へ、實録をして行く所らしいのでござりますな。

「しかも、その物盗りと云ふのが、昨夜、五條の坂で云ひよつた、あの男だらうぢやございませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて來たさうでございます。これは、當人が、手前に話しました——何も、その男に惚れてゐたの、どうしたのと云ふ譯ぢやないが、その繩目をうけた姿を見たら、急に自分で、自分がいぢらしくなつて、思はず泣いてしまつたと、まあかう云ふのでございますがな。まことにその話を聞いた時には、手前もつくづくさう思ひましたよ——」

「何とね。」

「觀音様へ願をかけるのも考へ物だとな。」

「だが、お爺さん。その女は、それから、どうにかやつて行けるやうになつたのだらう。」

「どうにかどころか、今では何不自由ない身の上になつて居ります。その綾や絹を賣つたのを本に致しましてな。觀音様も、これだけは、お約束をおちがへになりません。」

「それなら、その位な目に遇つても、結構ぢやないか。」

外の日の光は、何時の間にか、黄いろく夕づいた。その中を、風だつた竹藪の音が、か

すかながら其處此處から聞えて来る。往來の人通りも、暫くはとだえたらしい。

「人を殺したつて、物盗りの女房になつたつて、する氣でしたんでなければ仕方がないやね。」

青侍は、扇を帯へさしながら、立上つた。翁も、もう提の水で、泥にまみれた手を洗つてゐる——二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何かを、感じてでもゐるやうな容子である。

「兎に角、その女は仕合せ者だよ。」

「御冗談で。」

「まつたくさ。お爺さんも、さう思ふだらう。」

「手前でございますか。手前なら、さう云ふ運はまつびらでございますな。」

「へええ、さうかね。私なら、二つ返事で、授けて頂くがね。」

「ちや観音様を、御信心なさいまし。」

「さうく、明日から私も、お籠でもしようよ。」

—五年十二月—

藪の中

檢非違使に問はれたる木樵りの物語

さやうでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違ひございません。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた處でございますか？ それは山科の驛路からは、四五町程隔たつて居りませう。竹の中に瘦せ杉の交つた、人氣のない所でございます。

死骸は藪の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に染みたやうでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居つたやうでございます。おまけに其處には、馬糞が一匹、わたしの足音も聞えないやうに、べつたり食ひついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。唯その側の杉の根がたに、繩が一筋落ちて居りました。それから、——さうさう、繩の外にも櫛が一つございました。死骸のまはりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に

踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、餘程手痛い働きでも致したのに違ひございません。何、馬はゐなかつたか？ あそこは一體馬なぞには、はひれない所でございます。何しろ馬の通ふ路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

檢非違使に問はれたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございます。場所は關山から山科へ、参らうと云ふ途中でございます。あの男は馬に乗つた女としよに、關山の方へ歩いて参りました。女は傘子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師髪の馬のやうでございます。丈でございますか？ 丈は四寸もございませうか？ ——何しろ沙門の事でございますから、その邊ははつきり存じませぬ。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携へて居りました。殊に黒い塗り籠へ、二十あまり征矢をさしたのは、唯今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかやうにならうとは、夢にも思はずに居りましたが、まことに人間の命なぞは、

如露亦如電に違ひございませぬ。やれやれ、何とも申しやうのない、氣の毒な事を致しました。

檢非違使に問はれたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？ これは確かに多襄丸たじやうまると云ふ、名高い盗人でございます。尤もわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございませう、粟田口の石橋の上に、うんうん呻つて居りました。時刻でございますか？ 時刻は昨夜の初更頃でございます。何時ぞやわたしが捉へ損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。唯今はその外にも御覽の通り、弓矢の類さへ携へて居ります。さやうでございますか？ あの死骸の男が持つてゐたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違ひございませぬ。革を巻いた弓、黒塗りの箆おぼろ、鷹の羽の征矢が十七本、——これは皆、あの男が持つてゐたものでございませう。はい。馬も仰有る通り、法師髪ほうしげの月毛でございます。その畜生に落されるとは、何かの因縁に違ひございませぬ。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いた儘、路ばたの青芒を食つて居りました。

この多襄丸と云ふやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年の秋鳥部寺の賓頭びんづるの後の山に、物詣でに來たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されてゐたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗つてゐた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、何處へどうしたかわかりませぬ。差出がましようございませぬ、それも御詮議下さいませ。

檢非違使に問はれたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございませぬ。若狭の國府の侍でございます。名は金澤の武弘たけひろ、年は二十六歳でございました。いえ、優しい氣立でございますから、遺恨など受ける筈はございませぬ。

娘でございますか？ 娘の名は眞砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬ位、勝氣の女でございますが、まだ一度も武弘の外には、男を持つた事はございませぬ。顔は色の淺黒い、左の眼尻に墨子のある、小さい瓜實顔でございます。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立つたのでございませぬが、こんな事になりますとは、

何と云ふ因果でございませう。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願ひでございませうから、たとひ草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございませう。婿ばかりか、娘までも、……（跡は泣き入りて言葉なし。）

多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。では何處へ行つたのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されませう。その上わたしもかうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出會ひました。その時風の吹いた拍子に、ひしの垂絹が上つたものですから、ちらり女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思

ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその爲もあつたのでせう。わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとひ男は殺しても、女は奪はうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思つてゐるやうに、大した事ではありません。どうせ女を奪ふとなれば、必、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使ふのですが、あなた方は太刀を使はない、唯権力で殺す、金で殺す、どうかするとお爲こかしの言葉だけでも殺すでせう。成程血は流れない、男は立派に生きてゐる、——しかしそれも殺したのです。罪の深さを考へて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりませう。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪ふ事が出来れば、別に不足はない譯です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪はうと決心したのです。が、あの山科の驛路では、とてもそんな事は出来ませう。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚があ

る、この古塚を發ほいて見たら、鏡や太刀が澤山出た、わたしは誰も知らないやうに、山の陰の藪の中へ、さう云ふ物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値ねに賣り渡したい、——と云ふ話をしたのです。男は何時かわたしの話に、だんだん心を動かし初めました。それから、——どうです、怒こと云ふものは、恐おそしいではありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けてゐたのです。

わたしは藪の前へ來ると、實はこの中に埋めてある、見に来てくれと云ひました。男は怒こに湧いてゐますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つてゐると云ふのです。又あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう云ふのも無理はありません。わたしはこれも實を云へば、思ふ壺にはまつたのですから、女一人を残した儘、男と藪の中へはひりました。

藪は少時しばしばの間は竹ばかりです。が、半町程行つた處に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、實は杉の下に埋めてあると、尤ともらしい嘘をつきました。男はわたしにさう云はれると、もう瘦せ杉が透といて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が

疎らになると、何本も杉が並んでゐる、——わたしは其處へ來るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩はいてゐるだけに、力は相當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。繩なわですか？ 繩は盗人の有難さに、何時塀を越えるかわかりませんから、ちやんと腰につけてゐたのです。勿論聲を出させない爲にも、竹の落葉を煩張わづらせれば、外に面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまふと、今度は又女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云ひに行きました。これも圖星に當つたのは、申し上げるまでもあります。女は市女笠を脱いだ儘、わたしに手をとられながら、藪の奥へはひつて來ました。所が其處へ來て見ると、男は杉の根に縛むすられてゐる、——女はそれを一目見るなり、何時の間まに懐から出してゐたか、きらりと小刀こを引き抜きました。わたしはまだ今までに、あの位氣性の烈しい女は、一人も見ただ事ありません。もしその時でも油斷してゐたらば、一突きに脾腹を突かれたでせう。いや、それは身を躲した所が、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我也仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかか

うにか太刀も抜かずに、どうとう小刀を打ち落しました。いくら氣の勝つた女でも、得物がなければ仕方ありません。わたしはとうとう思ひ通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——さうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縫りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。いや、その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい、——さうも喘ぎ喘ぎ云ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より、残酷な人間に見えるでせう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、唯かう云ふ一事だけです。これはあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしその時色

慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう。男もさうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、ぢつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、此處は去るまいと覺悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の繩を解いた上、太刀打ちをしろと云ひました。(杉の根がたに落ちてゐたのは、その時捨て忘れた繩なのです。)男は血相を變へた儘、太い太刀を引き抜きました。と思ふと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありません。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つてゐるのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけです。(快活なる微笑)

わたしは男が倒れると同時に、血に染まつた刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女は何處にもゐないではありませんか？ わたしは女かどちへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残

つてみません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、斷末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶ爲に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。——わたしはさう考へると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐに又もとの山路へ出ました。其處にはまだ女の馬が、靜かに草を食つてゐます。その後の事は申し上げるだけ、無用の口數に過ぎますまい。唯、都へはひる前に、太刀だけはもう手放してゐました。——わたしの白狀はこれだけです。どうせ一度は樗の梢に、懸ける首と思つてゐますから、どうか極刑に遇はせて下さい。(昂然たる態度)

清水寺に來れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛られた夫を眺めながら、嘲るやうに笑ひました。夫はどんなに無念だつたでせう。が、いくら身悶えをしても、體中にかかつた繩目は、一層ひしひしと食ひ入るだけです。わたしは思はず夫の側へ、轉

ぶやうに走り寄りました。いえ、走り寄らうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしを其處へ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云ひやうのない輝きが、宿つてゐるのを覺りました。何とも云ひやうのない、——わたしはあの眼を思ひ出すと、今でも身震ひが出ずにはゐられません。口さへ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を傳へたのです。しかも其處に閃いてゐたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——唯わたしを蔑んだ、冷たい光だつたではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何處かへ行つてゐました。跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと變りません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せてゐるのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中は、何と云へば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覺になりました。わたしはこの儘あなた一人、お残し申す譯には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云ひました。それでも夫は忌はしさに、わたしを見つめてゐるばかりなのです。わたしは裂けさうな胸を抑へながら、夫の太刀を探しました。が、あの盗人に奪はれたのでせう、太刀は勿論弓矢さへも、藪の中には見當りません。しかし幸ひ小刀だけは、わたしの足もとに落ちてゐるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にかう云ひました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やつと脣を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまつてゐますから、聲は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を覺りました。夫はわたしを蔑んだ儘、「殺せ」と一言云つたのです。わたしは殆、夢うつつの内に、夫の縹はだの水干の胸へ、づぶりと小刀を刺し通しました。

わたしは又この時も、氣を失つてしまつたのでせう。やつとあたりを見まはした時には、

夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えてゐました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一寸お落ちてゐるのです。わたしは泣き聲を呑みながら、死骸の繩を解き捨てました。さうして、——さうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力ありません。兎に角わたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにかうしてゐる限り、これも自慢にはなりません。(寂しき微笑) わたしのやうに腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでせう？ 一體わたしは、——わたしは、——(突然烈しき歎歎)

巫女の口を借りたる死霊の物語

——盗人は妻を手ごめにする、其處へ腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。體も杉の根に縛られてゐる。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云ふ事を眞に受けるな、何を云つても嘘と思へ、——おれはそんな

意味を傳へたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、ちつと膝へ目をやつてゐる。それがどうも盗人の言葉に、聞き入つてゐるやうに見えるではないか？ おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めてゐる。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の妻になる氣はないか？ 自分はいとしと思へばこそ、大それた眞似も働いたのだ、——盗人はとうとう大膽にも、さう云ふ話さへ持ち出した。

盗人にかう云はれると、妻はうつとりと顔を擡げた。おれはまだあの時程、美しい妻は見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有に迷つてゐても、妻の返事を思ひ出す毎に、噴き怒りに燃えなかつたためしはない。妻は確にかう云つた、——「では何處へでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、今程おれも苦しみはしまし。しかし妻は夢のやうに、盗人に手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顔色を失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」——妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び

立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のやうに、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様におれを吹き落さうとする。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があらうか？ 一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れた事があらうか？ 一度でもこの位、——（突然迸る如き嘲笑）その言葉を聞いた時は、盗人さへ色を失つてしまつた。「あの人を殺して下さい。」——妻はさう叫びながら、盗人の腕に縋つてゐる。盗人はちつと妻を見た儘、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思ふか思はない内に、妻は竹の落葉の上へ、唯、一蹴りに蹴倒された。（再、迸る如き嘲笑）盗人は靜かに兩腕を組むと、おれの姿へ眼をやつた。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事は唯領けば好い。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりた

い。（再、長き沈黙）

妻はおれがためらふ内に、何か一聲叫ぶが早いか、忽ち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかつたが、これは袖さへ捉へなかつたらしい。おれは唯、幻のやうに、さう云ふ景色を眺めてゐた。

盗人は妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの繩を切つた。

「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまふ時、かう呟いたのを覚えてゐる。その跡は何處も静かだつた。いや、まだ誰かの泣く聲がする。おれは繩を解きながら、ぢつと耳を澄ませて見た。が、その聲も氣がついて見れば、おれ自身の泣いてゐる聲だつたではないか？（三度、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた體を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。唯胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまつた。ああ、何と云ふ静かさだらう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽轉りに來ない。唯杉や竹の杪さかに、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、——それも次第に薄れて來る。もう杉や竹も見えない。おれは其處に倒れた儘、深い静かさに包まれてゐる。

その時誰か忍び足に、おれの側へ來たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまはりには、何時か薄闇が立ちこめてゐる。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて來る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまつた。……………

手 巾

東京帝國法科大學教授、長谷川謹造先生は、ヴェランダの籐椅子に腰をかけて、ストリントベルクの作劇術ドラマツルギーを讀んでゐた。

先生の専門は、殖民政策の研究である。従つて讀者には、先生がドラマトウルギイを讀んでゐると云ふ事が、聊、唐突の感を與へるかも知れない。が、學者としてのみならず、教育家としても、令名ある先生は、専門の研究に必要でない本でも、それが何等かの意味で、現代の學生の思想なり、感情なりに、關係のある物は、暇のある限り、必、一應は、眼を通して置く。現に、昨今は、先生の校長を兼ねてゐる或高等専門學校の生徒が、愛讀すると云ふ、唯、それだけの理由から、オスカア・ワイルドのデ・プロフンデイスとか、インテンションズとか云ふ物さへ、一讀の勞を執つた。さう云ふ先生の事であるから、今讀んでゐる本が、歐洲近代の戯曲及俳優を論じた物であるにしても、別に不思議がる所はない。何故と云へば、先生の薰陶を受けてゐる學生の中には、イブセンとか、ストリントベルクとか、乃至メエテルリンクとかの評論を書く學生が、ゐるばかりでなく、進んでは、さう云ふ近代の戯曲家の跡を追つて、作劇を一生の仕事にしようとする、熱心家さへゐるからである。

先生は、警拔な一章を讀み了る毎に、黄いろい布表紙の本を、膝の上へ置いて、ヴェランダに吊してある岐阜提灯の方を、漫然と一瞥する。不思議な事に、さうするや否や、先生の思量は、ストリントベルクを離れてしまふ。その代り、一しよにその岐阜提灯を買ひに行つた、奥さんの事が、心に浮んで来る。先生は、留學中、米國で結婚をした。だから、奥さしよ、勿論、亞米利加人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも變りがない。殊に、日本の巧緻なる美術工藝品は、少からず奥さんの氣に入つてゐる。従つて、岐阜提灯セヴェランダにぶら下げたのも、先生の好みと云ふよりは、寧ろ、奥さんの日本趣味が、一端を現したものと見て、然る可きであらう。

先生は、本を下に置く度に、奥さんと岐阜提灯と、さうして、その提灯によつて代表される日本の文明とを思つた。先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、可成顯著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆、これと云ふ程の進歩も認める事が出来ない。否、寧ろ、或意味では、墮落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この墮落を救済する途を講ずるのには、どうしたらいいのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論斷した。武士道なるものは、決して

偏狭なる島國民の道德を以て、目せらるべきものでない。却てその中には、歐米各國の基督教的精神と、一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に歸趣を知らしめる事が出来るならば、それは、獨り日本の精神的文明に貢獻する所があるばかりではない。惹いては、歐米各國民と日本國民との相互の理解を容易にすると云ふ利益がある。或は國際間の平和も、これから促進されると云ふ事があるであらう。——先生は、日頃から、この意味に於て、自ら東西兩洋の間に横はる橋梁にならうと思つてゐる。かう云ふ先生にとつて、奥さんと岐阜提灯と、その提灯によつて代表される日本の文明とが、或調和を保つて、意識に上るのは決して不快な事ではない。

所が、何度かこんな満足を繰返してゐる中に、先生は、追々、讀んでゐる中でも、思量がストリントベルクとは、縁の遠くなるのに氣がついた。そこで、ちよいと、忌々しさうに頭を振つて、それから又丹念に、眼を細い活字の上に曝しはじめた。すると、丁度、今讀みかけた所にこんな事が書いてある。

——俳優が最も普通なる感情に對して、或一つの恰好な表現法を發見し、この方法によつて成功を贏ち得る時、彼は時宜に適すると適せざるとを問はず、一面にはそれが樂であ

る所から、又一面には、それによつて成功する所から、動もすればこの手段に赴かんとする。しかし夫が即ち型タイプなのである。……

先生は、由來、藝術——殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさへ、この年まで何度と數へる程しか、見た事がない。——嘗て或學生の書いた小説の中に、梅幸と云ふ名が、出て來た事がある。流石、博覽強記を以て自負してゐる先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない。そこで序の時に、その學生を呼んで、訊いて見た。

——君、梅幸と云ふのは何だね。

——梅幸——ですか。梅幸と云ひますのは、當時、丸の内の帝國劇場の座附俳優で、唯今、太閤記十段目の操を勤めて居る役者です。

小倉の袴をはいた學生は、慇懃に、かう答へた。——だから、先生は、ストリントベルクが、簡勁な筆で論評を加へて居る各種の演出法に對しても、先生自身の意見と云ふものは、全然ない。唯、それが、先生の留學中、西洋で見た芝居の或ものを聯想させる範圍で、幾分か興味を持つ事が出来るだけである。云はば、中學の英語の教師が、イデオムを探す爲に、バアナアド・ショウの脚本を讀むと、別に大した相違はない。が、興味は、曲りな

りにも、興味である。

ヴェランダの天井からは、まだ灯をともしない岐阜提灯が下つてゐる。さうして、籐椅子の上では、長谷川謹造先生が、ストリントベルクのドラマトウルギイを讀んでゐる。自分は、これだけの事を書きさへすれば、それが、如何に日の長い初夏の午後であるか、讀者は容易に想像のつく事だらうと思ふ。しかし、かう云つたからと云つて、決して先生が無聊に苦しんでゐると云ふ譯ではない。さう解釋しようとする人があるならば、それは自分の書く心もちを、わざとシニカルに曲解しようとするものである。——現在、ストリントベルクさへ、先生は、途中でやめなければならなかつた。何故と云へば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げてしまつたからである。世間は、いくら日が長くても、先生を忙殺しなければ、止まないらしい。……

先生は、本を置いて、今し方小間使が持つて來た、小さな名刺を一瞥した。象牙紙に、細く西山篤子と書いてある。どうも、今までに逢つた事のある人では、ないらしい。交際の廣い先生は、籐椅子を離れながら、それでも念の爲に、一通り、頭の中の人名簿を繰つて見た。が、やはり、それらしい顔も、記憶に浮んで來ない。そこで、葉代りに、名刺を

本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置くと、先生は、落着かない容子で、銘仙の單衣の前を直しながら、ちよいと又、鼻の先の岐阜提灯へ眼をやつた。誰もさうであらうが、待たせてある客より、待たせて置く主人の方が、かう云ふ場合は多く待遠しい。尤も、日頃から謹嚴な先生の事だから、これが、今日のやうな未知の女客に對してでなくとも、さうだと云ふ事は、わざ／＼斷る必要もないであらう。

やがて、時刻をはかつて、先生は、應接室の扉をあけた。中へはひつて、おさへてゐたノツブを放すのと、椅子にかけてゐた四十恰好の婦人の立上つたのが、殆、同時である。客は、先生の判別を超越した、上品な鐵御納戸の單衣を着て、それを黒の絹の羽織が、胸だけ細く剩した所に、帶止めの翡翠を、涼しい菱の形にうき上らせてゐる。髪が、丸髻に結つてある事は、かう云ふ些事に無頓着な先生にも、すぐわかつた。日本人に特有な、丸顔の、琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は、一瞥して、この客の顔を、どこかで見た事があるやうに思つた。

——私が長谷川です。

先生は、愛想よく、會釋した。かう云へば、逢つた事があるのなら、向うで云ひ出すだ

らうと思つたからである。

——私は、西山憲一郎の母でございます。

婦人は、はつきりした聲で、かう名乗つて、それから、丁寧に、會釋を返した。

西山憲一郎と云へば、先生も覚えてゐる。やはりイブセンやストリントベルクの評論を書く生徒の一人で、専門は確か獨法だつたかと思ふが、大學へはひつてからも、よく思想問題を提げては、先生の許に出入した。それが、この春、腹膜炎に罹つて、大學病院へ入院したので、先生も序ながら、一二度見舞ひに行つてやつた事がある。この婦人の顔を、どこかで見た事があるやうに思つたのも、偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいい青年と、この婦人とは、日本の俗諺が、瓜二つと形容するやうに、驚く程、よく似てゐるのである。

——はあ、西山君の……さうですか。

先生は、獨りで頷きながら、小さなテエブルの向うにある椅子を指した。

——どうか、あれへ。

婦人は、一應、突然の訪問を謝してから、又、丁寧に禮をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは、手巾であらう。先生は、それを見ると、

早速テエブルの上の朝鮮團扇をすすめながら、その向う側の椅子に、座をしめた。

——結構なおすまひでございます。

婦人は、稍、わざとらしく、室の中を見廻した。

——いや、廣いばかりで、一向かまひません。

かう云ふ挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて來た冷茶を、客の前に直させながら、直に話頭を相手の方へ轉換した。

——西山君は如何です。別段御容態に變りはありませんか。

——はい。

婦人は、つましく両手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切つて、それから、靜にかう云つた。やはり、落着いた、滑かな調子で云つたのである。

——實は、今日も件の事で上つたのでございますが、あれもとうとう、いけませんでございまして。存生中は、いろいろ先生にも御厄介になりました……

婦人が手にとらないのを遠慮だと解釋した先生は、この時丁度、紅茶茶碗を口へ持つて行かうとしてゐた。なまじひに、くどく、すすめるよりは、自分で啜つて見せる方がいい

と思つたからである。所が、まだ茶碗が、柔な口髭にとどかない中に、婦人の語は、突然、先生の耳をおびやかした。茶を飲んだものだらうか、飲まないものだらうか。——かう云ふ思案が、青年の死とは、全く獨立して、一瞬の間、先生の心を煩はした。が、何時までも、持ち上げた茶碗を、片づけずに置く譯には行かない。そこで先生は思切つて、がぶりと半碗の茶を飲むと、心もち肩をひそめながら、むせるやうな聲で、「そりやあ」と云つた。

——……病院に居りました間も、よくあれがお噂なぞ致したものでございますから、お忙しからうとは存じましたが、お知らせかたがた、お禮を申上げようと思ひまして……

——いや、どうしまして。

先生は、茶碗を下へ置いて、その代りに青い蠟を引いた團扇をとりあげながら、無然として、かう云つた。

——とうとう、いけませんでしたかなあ。丁度、これからと云ふ年だつたのですが……私は又、病院の方へも御無沙汰してゐたものですから、もう大抵、よくなられた事だとはかり、思つてゐました。——すると、何時いつになりますかな、なくなられたのは。

——昨日が、丁度初七日でございます。

——やはり病院の方で……

——さやうでございます。

——いや、實際、意外でした。

——何しろ、手のつくせる丈は、つくした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございませんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴が出ていけませんものでございます。

こんな對話を交換してゐる間に、先生は、意外な事實に氣がついた。それは、この婦人の態度なり、舉措なりが、少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくないと云ふ事である。眼には、涙もたまつてゐない。聲も、平生の通りである。その上、口角には、微笑さへ浮んでゐる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、この婦人は、家常茶飯事を語つてゐるとしか、思はなかつたのに相違ない。——先生には、これが不思議であつた。

——昔、先生が、伯林に留學してゐた時分の事である。今のカイゼルのおとうさんに當る、ウイルヘルム第一世が、崩御された。先生は、この訃音を行きつけの珈琲店で耳にしたが、元より一通りの感銘しかうけやうはない。そこで、何時ものやうに、元氣のいい顔

をして、杖を脇にはさみながら、下宿へ歸つて來ると、下宿の子供が二人、扉をあけるや否や、兩方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は、茶色のジャケツトを着た、十二になる女の子で、一人は、紺の短いズボンをはいた、九つになる男の子である。子煩悩な先生は、譯がわからないので、二人の明い色をした髪の毛を撫でながら、しきりに「どうした。どうした。」と云つて慰めた。が、子供は、中々泣きやまない。さうして、涙をすゝり上げながら、こんな事を云ふ。

——おぢいさまの陛下が、おなくなりなすつたのですつて。

先生は、一國の元首の死が、子供にまで、これ程悲まれるのを、不思議に思つた。獨り皇室と人民との關係と云ふやうな問題を、考へさせられたばかりではない、西洋へ來て以來、何度も先生の視聽を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。その時の怪訝と同情とを一つにしたやうな心もちは、未^{いまだ}に忘れようとしても、忘れる事が出来ない。——先生は、今も丁度、その位な程度で、逆に、この婦人の泣かないのを、不思議に思つてゐるのである。

が、第一の發見の後には、間もなく、第二の發見が次いで起つた。——

丁度、主客の話題が、なくなつた青年の追懷から、その日常生活のデイトイルに及んで、更に又、もとの追懷へ戻らうとしてゐた時である。何かの拍子で、朝鮮團扇が、先生の手をすべつて、ぱたりと寄木の床の上に落ちた。會話は無論寸刻の斷續を許さない程、切迫してゐる譯ではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて、床の方へ手をのばした。團扇は、小さなテエブルの下に——上靴にかくれた婦人の白足袋の側に落ちてゐる。

その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持つた手が、のつてゐる。勿論これだけでは、發見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手は、はげしく、ふるへてゐるのに氣がついた。ふるへながら、それが感情の激動を強ひて抑へようとするせゐるか、膝の上の手巾を、兩手で裂かないばかりに緊く、握つてゐるのに氣がついた。さうして、最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にもふかれてゐるやうに、縁^{めだち}のある縁を動かしてゐるのに氣がついた。——婦人は、顔でこそ笑つてゐたが、實はさつきから、全身で泣いてゐたのである。

團扇を拾つて、顔をあげた時に、先生の顔には、今までにない表情があつた。見てはな

らないものを見たと言ふ敬虔な心もちと、さう云ふ心もちの意識から来る或満足とが、多少の芝居氣で、誇張されたやうな、甚、複雑な表情である。

——いや、御心痛は、私のやうな子供のない者にも、よくわかります。

先生は、眩しいものでも見るやうに、稍、大仰に、頸を反らせながら、低い、感情の籠った聲でかう云つた。

——有難うございます。が、今更、何と申しましても、返らない事でございますから……
婦人は、心もち頭を下げた。晴々した顔には、依然として、ゆたかな微笑が、たたへてゐる。——

* * * * *

それから、二時間の後である。先生は、湯にはひつて、晩飯をすませて、食後の櫻實をつまんで、それから又、樂々と、ヴェランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は、何時までも薄明りをただよはせて、硝子戸をあけはなした廣いヴェランダは、まだ容易に、暮れさうなけはひもない。先生は、そのかすかな光の中で、さつきから、左の膝を右の膝の上へおせて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提灯の

赤い房を眺めてゐる。例のストリントベルクも、手にはとつて見たものの、まだ一頁も讀まならしい。それも、その筈である。——先生の頭の中は、西山篤子夫人のけなげな振舞で、未だに一ぱいになつてゐた。

先生は、飯を食ひながら、奥さんに、その一部始終を、話して聞かせた。さうして、それを、日本の女の武士道だと賞讃した。日本と日本人とを愛する奥さんが、この話を聞いて、同情しない筈はない。先生は、奥さんに熱心な聴き手を見出した事を、満足に思つた。奥さんと、さつきの婦人と、それから岐阜提灯と——今では、この三つが、或倫理的な背景を持つて、先生の意識に浮んで来る。

先生はどの位、長い間、かう云ふ幸福な回想に耽つてゐたか、わからない。が、その中に、ふと或雑誌から、寄稿を依頼されてゐた事に氣がついた。その雑誌では「現代の青年に與ふる書」と云ふ題で、四方の大家に、一般道徳上の意見を徴してゐたのである。今日の事件を材料にして、早速、所感を書いて送る事にしよう。——かう思つて、先生は、ちよいと頭を掻いた。

掻いた手は、本を持つてゐた手である。先生は、今まで閑却されてゐた本に、氣がついて、

さつき入れて置いた名刺を印に、読みかけた頁を開いて見た。丁度、その時、小間使が来て、頭の上の岐阜提灯をともしたので、細い活字も、さほど讀むのに煩はしくない。先生は、別に讀む氣もなく、漫然と眼を頁の上に落した。ストリントベルクは云ふ。

——私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分巴里から出たものらしい、手巾のことを話した。それは、顔は微笑してゐながら、手は手巾を二つに裂くと云ふ、二重の演技であつた。それを我等は今、泉味と名づける。……

先生は、本を膝の上に置いた。開いたまま置いたので、西山篤子と云ふ名刺が、また頁のまん中につてゐる。が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。さうかと云つて、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それからの平穩な調和を破らうとする、得體の知れない何物かである。ストリントベルクの指弾した演出法と、實踐道德上の問題とは、勿論ちがふ。が、今、讀んだ所からうけた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心もちを、擾さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と——

先生は、不快さうに二三度頭を振つて、それから又上眼を使ひながら、ぢつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……

——五年九月——

風

元治元年十一月二十六日、京都守護の任に當つてゐた、加州家の同勢は、折からの長州征伐に加はる爲、國家老の長大隅守を大將にして、大阪の安治川口から、船を出した。

小頭は、佃久太夫、山岸三十郎の二人で、佃組の船には白幟、山岸組の船には赤幟が立つてゐる。五百石積の金毘羅船が、皆それぞれ、紅白の幟を風にひるがへして、川口を海へのり出した時の景色は、如何にも勇ましいものだつたさうである。

しかし、その船へ乗組んでゐる連中は、中中勇ましがつてゐる所の騒ぎではない。第一どの船にも、一艘に、主従三十四人、船頭四人、併せて三十八人づつ乗組んでゐる。だから、船の中は、皆、身動きも縁に出来ない程狭い。それから又、胴の間には、澤庵漬を鱒桶へつめたのが、足のふみ所もない位、ならべてある。慣れない内は、その臭氣を嗅くと、誰でもすぐに、吐き氣を催した。最後に舊曆の十一月下旬だから、海上を吹いて来る風が、まるで身を切るやうに冷たい。殊に日が暮れてからは、摩耶嵐なり水の上なり流石に北國生れの若侍も、多くは齒の根が合はないと云ふ始末であつた。

その上、船の中には、虱が澤山ゐた。それも、着物の縫目にかくれてゐるなどと云ふ、生やさしい虱ではない。帆にもたかつてゐる。幟にもたかつてゐる。櫓にもたかつてゐる。櫓にもたかつてゐる。少し誇張して云へば、人間を乗せる爲の船だか、虱を乗せる爲の船だか、判然しない位である。勿論その位だから、着物には、何十匹となくたかつてゐる。さうして、それが人肌にさへさはれば、すぐに、いい氣になつて、ちくちくやる。それも、五匹や十匹なら、どうにでも、せいとうのしやうがあるが、前にも云つた通り、白胡麻をふり撒いたやうに、澤山ゐるのだから、とても、とりつくすなどと云ふ事が出来る筈のものではない。だから、佃組と山岸組とを問はず、船中にゐる侍と云ふ侍の體は、悉く虱に食はれた痕で、まるで癩疹にでも罹つたやうに、胸と云はず腹と云はず、一面に赤く腫れ上つてゐた。

しかし、いくら手のつけやうがないと云つても、そのまま打遣つて置くわけには、猶行かない。そこで、船中の連中は、暇さへあれば、虱狩をやつた。上は家老から下は草履取まで、悉く裸になつて、隨所にゐる虱をてんで茶呑茶碗の中へ、取つては入れ、取つては入れするのである。大きな帆に内海の冬の日をうけた金毘羅船の中で、三十何人かの侍

が、湯もじ一つに茶吞茶碗を持つて、帆綱の下、錨の陰と、一生懸命に風ばかり、さがして歩いた時の事を想像すると、今日では誰しも滑稽だと云ふ感じが先に立つ。が、『必要』の前に、一切の事が眞面目になるのは、維新以前と雖も、今と別に變りはない。——そこで、一船の裸侍は、それ自身が大きな風のやうに、寒いのを我慢して、毎日根氣よく、そこそこ歩きながら、丹念に板の間の風ばかりつぶしてゐた。

二

所が佃組の船に、妙な男が一人ゐた。これは森権之進と云ふ中老のつむじ曲りで、身分は七十五俵五人扶持の御徒士である。この男だけは不思議に、風をとらない。とらないから、勿論、何處と云はず、たかつてゐる。鬚ぶしへのぼつてゐる奴があるかと思ふと、袴腰のふちを渡つてゐる奴がある。それでも別段、氣にかける様子がない。

では、この男だけ、風に食はれないのかと云ふと、又さうでもない。やはり外の連中のやうに、體中、金錢斑々とも形容したらよからうと思ふ程、所まだらに赤くなつてゐる。その上、當人がそれを搔いてゐる所を見ると、痒くない譯でもないらしい。が、痒くつて

も何でも、一向平氣ですましてゐる。

すましてゐるだけなら、まだいいが、外の連中が、せつせと風狩をしてゐるのを見ると、必、わきからこんな事を云ふ。——

「とるなら、殺し召さるな。殺さずに茶碗へ入れて置けば、わしが貰うて進ぜよう。」

「貰うて、どうさつしやる？」同役の一人が、呆れた顔をして、かう尋ねた。

「貰うてか。貰へばわしが飼うておくまでぢや。」

森は、恬然として答へるのである。

「では殺さずにとつて進ぜよう。」

同役は、冗談だと思つたら、二三人の仲間と一しよに半日がかりで、風を生きたまま、茶吞茶碗へ二三杯とりためた。この男の腹では、かうして置いて「さあ飼へ」と云つたら、いくら依怙地な森でも、閉口するだらうと思つたからである。

すると、こつちからはまだ何とも云はない内に、森が自分の方から聲をかけた。

「とれたかな。とれたらわしが貰うて進ぜよう。」

同役の連中は、皆、驚いた。

「ではここへ入れてくれさつしやい。」

森は平然として、着物の襟をくつろげた。

「瘦我慢をして、あとでお困りなさるな。」

同役がかう云つたが、當人は耳にもかけない。そこで一人づつ、持つてゐる茶碗を倒にして、米屋が一合斛で米をはかるやうに、ぞろぞろ虱をその襟元へあけてやると、森は、大事さうに外へこぼれた奴を拾ひながら、

「有難い。これで今夜から暖に眠られるて。」といふ獨語を云ひながら、にやにや笑つてゐる。

「虱がゐると、暖うござるかな。」

呆氣にとられてゐた同役は、皆互に顔を見合せながら、誰に尋ねるともなく、かう云つた。すると、森は、虱を入れた後の襟を、丁寧に直しながら、一應、皆の顔を莫迦にしたやうに見まはして、それからこんな事を云ひ出した。

「各々は皆、この頃の寒さで、虱をひかれるがな、この權之進はどうぢや。噓もせぬ。漢もたらさぬ。まして、熱が出たの、手足が冷えるのと云うた覺は、嘗てあるまい。各々は

これを、誰のおかげぢやと思はつしやる。——みんな、この虱のおかげぢや。」

何でも森の説によれば、體に虱がゐると、必、ちくちく刺す。刺すから、どうしても掻きたくなる。そこで、體中萬遍なく刺されると、やはり體中萬遍なく掻きたくなる。所が人間と云ふものはよくしたもので、痒い痒いと思つて掻いてゐる中に、自然と掻いた所が、熱を持つたやうに温くなつて来る。そこで、温くなつてくれば、睡くなつて来る。睡くなつて来れば、痒いのもわからない。——かう云ふ調子で、虱さへ體に澤山ゐれば、睡つきもいし風もひかない。だからどうしても、虱飼ふべし、狩るべからずだと云ふのである。……

「成程、そんなものでござるかな。」同役の二三人は、森の虱論を聞いて、感心したやうに、かう云つた。

三

それから、その船の中では、森の眞似をして、虱を飼ふ連中が出來て來た。この連中も、暇さへあれば、茶呑茶碗を持つて虱を追ひかけてゐる事は、外の仲間と別に變りがない。唯、ちがふのは、その取つた虱を、一々刻銘に懷に入れて、大事に飼つて置く事だけである。

しかし、何處の國、何時の世でも、Précurseur の説が、そのまま何人にも容れられると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論に反對する、Pharisien が大勢ゐた。

中でも、筆頭第一の Pharisien は井上典藏の御徒士である。これも亦妙な男で、虱をとると必、皆食つてしまふ。夕がた飯をすませると、茶呑茶碗を前に置いて、うまさうに何かぶつりぶつり嚙んでゐるから、側へよつて茶碗の中を覗いて見ると、それが皆、とりためた虱である。「どんな味でござる？」と訊くと、「左様さ。油臭い、焼米のやうな味でござらう。」と云ふ。虱を口でつぶす者は、何處にでもあるが、この男はさうではない。全く點心を食ふ氣で、毎日虱を食つてゐる。——これが先、第一に森に反對した。

井上のやうに、虱を食ふ人間は、外に一人もゐないが、井上の反對説に加擔をする者は可成ゐる。この連中の云ひ分によると、虱がゐたからと云つて、人間の體は決して温まるものではない。そのみならず、孝經にも、身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なりとある。自、好んでその身體を、虱如きに食はせるのは、不孝も亦甚しい。だから、どうしても、虱狩るべし。飼ふべからずだと云ふのである。……

かう云ふ行きがかりで、森の仲間と井上の仲間との間には、時折口論が持上がる。それ

も、唯、口論位ですんでゐた内は、差支へない。が、とうとう、しまひには、それが素で、思ひもよらない刃傷沙汰さへ、始まるやうな事になつた。

それと云ふのは、或日、森が、又大事に飼はうと思つて、人から貰つた虱を茶碗へ入れてとつて置くと、油断を見すまして井上が、何時の間にかそれを食つてしまつた。森が來て見ると、もう一匹もない。そこで、この Précurseur が腹を立てた。

「何故、人の虱を食はしつた。」

張肘をしながら、眼の色を變へて、かうつめよると、井上は、

「自體、虱を飼ふと云ふのが、たはげぢやての。」と、空嘯いて、まるで取合ふけしきがない。

「食ふ方がたはげぢや。」

森は、躍起となつて、板の間をたたきながら、

「これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬ者がござるか。その虱を取つて食ふなどは、恩を仇でかへすのも同然ぢや。」

「身共は、虱の恩を着た覺えなどは、毛頭ござらぬ。」

「いや、たとひ恩を着ぬにもせよ、妄に生類の命を斷つなどは、言語道斷でござらう。」

二言三言云ひつものつたと思ふと、森がいきなり眼の色を變へて、蝦鞘卷の柄に手をかけた。勿論、井上も負けてはゐない。すぐに、朱鞘の長物をひきよせて、立上る。——裸で虱をとつてゐた連中が、慌てて兩人を取押へなかつたなら、或はどちらか一方の命にも關する所であつた。

この騒ぎを實見した人の話によると、二人は、一同に抱きすくめられながら、それでもまだ口角に泡を飛ばせて、「虱。虱。」と叫んでゐたさうである。

四

かう云ふ具合に、船中の侍たちが、虱の爲に双傷沙汰を引起してゐる間でも、五百石積の金毘羅船だけは、まるでそんな事には頓着しないやうに、紅白の幟を寒風にひるがへしながら、遙々として長州征伐の途に上るべく、雪もよひの空の下を、西へ西へと走つて行つた。

——五年三月——

秋

信子は女子大學にゐた時から、才媛の名聲を擔つてゐた。彼女が早晚作家として文壇に打つて出る事は、殆ど疑はなかつた。中には彼女が在學中、既に三百何枚かの自叙傳體小説を書き上げたなどと吹聴して歩くものもあつた。が、學校を卒業して見ると、まだ女學校も出てゐない妹の照子と彼女とを抱へて、後家を立て通して來た母の手前も、さうは我儘を云はれない、複雑な事情もないではなかつた。そこで彼女は創作を始める前に、まづ世間の習慣通り、縁談からきめてかかるべく餘儀なくされた。

彼女には俊吉と云ふ從兄いとこがあつた。彼は當時まだ大學の文科に籍を置いてゐたが、やはり將來は作家仲間を身を投ずる意志があるらしかつた。信子はこの從兄いとこの大學生と、昔から親しく往來してゐた。それが互に文學と云ふ共通の話題が出来てからは、愈々親しみが増したやうであつた。唯、彼は信子と違つて、當世流行のトルストイズムなどには一向敬意を表さなかつた。さうして始終フランス仕込みの皮肉や警句ばかり並べてゐた。かく云ふ俊吉の冷笑的な態度は、時々萬事眞面目な信子を怒らせてしまふ事があつた。が、彼女

は怒りながらも俊吉の皮肉や警句の中に、何か輕蔑出來ないものを感じない譯には行かなかつた。

だから彼女は在學中も、彼と一しよに展覽會や音樂會へ行く事が稀ではなかつた。尤も大抵そんな時には、妹の照子も同伴いっしょであつた。彼等三人は往きも返りも、氣兼ねなく笑つたり話したりした。が、妹の照子だけは、時々話の圈外へ置きざりにされる事もあつた。それでも照子は子供らしく、飾窓かざりまどの中のバラソルや絹のシヨオルを覗き歩いて、格別闊却された事を不平に思つてもゐないらしかつた。信子はしかしそれに氣がつくと、必、話頭を轉換して、すぐに又元の通り妹にも口をきかせようとした。その癖まづ照子を忘れるものは、何時も信子自身であつた。俊吉はすべてに無頓着なのか、不相變氣の利いた冗談ばかり投げつけながら、目まぐるしい往來の人通りの中を、大股にゆつくり歩いて行つた。

……

信子と從兄いとことの間からは、勿論誰の眼に見ても、來るべき彼等の結婚を豫想させるのに十分であつた。同窓たちは彼女の未來をてんで羨んだり妬んだりした。殊に俊吉を知らな

いものは、(滑稽と云ふより外はないが)、一層これが甚だしかつた。信子も亦一方では彼

等の推測を打ち消しながら、他方ではその確な事をそれとなく故意に仄かせたりした。従つて同窓たちの頭の中には、彼等が學校を出るまでの間に、何時か彼女と俊吉との姿か、恰も新婦新郎の寫眞の如く、一しよにはつきり焼きつけられてゐた。

所が學校を卒業すると、信子は彼等の豫期に反して、大阪の或商事會社へ近頃勤務する事になつた、高商出身の青年と、突然結婚してしまつた。さうして式後二三日してから、新夫と一しよに勤め先きの大阪へ向けて立つてしまつた。その時中央停車場へ見送りに行つたもの話によると、信子は何時もと變りなく、晴れ晴れした微笑を浮べながら、ともしれば涙を落し勝ちな妹の照子をいろいろと慰めてゐたと云ふ事であつた。

同窓たちは皆不思議があつた。その不思議がる心の中には、妙に嬉しい感情と、前とは全然違つた意味で妬ましい感情とが交つてゐた。或者は彼女を信賴して、すべてを母親の意志に歸した。又或ものは彼女を疑つて、心はりがしたとも云ひふらした。が、それらの解釋が結局想像に過ぎない事は、彼等自身さへ知らない譯ではなかつた。彼女はなぜ俊吉と結婚しなかつたか？ 彼等はその後暫くの間、よるとさはると重大らしく、必、この疑問を話題にした。さうして彼は二月ばかり経つと——全く信子を忘れてしまつた。勿論彼

女が書く筈だつた長篇小説の噂なども。

信子はその間に大阪の郊外へ、幸福なるべき新家庭をつくつた。彼等の家はその界限でも、最も閑靜な松林にあつた。松脂の匂と日の光と、——それが何時でも夫の留守は、二階建の新しい借家の中に、活き活きした沈黙を領してゐた。信子はさう云ふ寂しい午後、時々理由もなく氣が沈むと、きつと針箱の抽斗を開けては、その底に疊んでしまつてある桃色の書簡箋をひろげて見た。書簡箋の上にはこんな事が、細々とペンで書いてあつた。

「——もう今日かぎり御姉様と御一しよにゐる事が出来ないと思ふと、これを書いてゐる間でさへ、止め度なく涙が溢れて來ます。御姉様、どうか、どうか私をお赦し下さい。照子は勿體ない御姉様の犠牲の前に、何と申し上げて好いかもわからずに居ります。

「御姉様は私の爲に、今度の御縁談をおきめになりました。さうではないと仰有つても、私にはよくわかつて居ります。何時ぞや御一しよに帝劇を見物した晩、御姉様は私に俊さんは好きかとお尋きになりました。それから又好きならば、御姉様かきつと骨を折るから、俊さんの所へ行けとも仰有いました。あの時もう御姉様は、私が俊さんに差上げる筈の手紙を讀んでいらしたのでせう。あの手紙がなくなつた時、ほんたうに私は御姉様をお恨

めしく思ひました。(御免遊ばせ。この事だけでも私はどの位申し譯かないかわかりません)です。それからその晩も私には、御姉様の親切なお言葉も、皮肉のやうな氣さへ致しました。私が怒つて御返事らしい御返事も碌に致さなかつた事は、もちろんお忘れになりもなさりませぬ。けれどもあれから二三日経つて、御姉様の御縁談が急にきまつてしまつた時、私はそれこそ死んででも、お詫びをしようかと思ひました。御姉様もお好きなのでございますもの。(お隠しになつてはいや。私はよく存じて居りましたよ。)私の事さへおままひにならなければ、きつと御自分が俊さんの所へいらしたのに違ひございません。それでも御姉様は私に、俊さんなどは思つてゐないと、何度も繰返して仰いました。さうしてたうとう心にもない御結婚をなすつておしまひになりました。私の大事な御姉様。私が今日鶏を抱いて来て、大阪へいらつしやる御姉様に、御挨拶をなさいと申した事をまだ覚えていらしつて? 私は飼つてゐる鶏にも、私と一しよに御姉様へお詫びを申して貰ひたかつたの。さうしたら、何にも御存知ない御母様までお泣きになりましたのね。

「御姉様。もう明日は大阪へいらしつておしまひなさるでせう。けれどもどうか何時までも、御姉様の照子を見捨てずに頂戴、照子は毎朝鶏に餌をやりながら、御姉様の事を思ひ

出して、誰にも知れず泣いてゐます。……」

信子はこの少女らしい手紙を讀む毎に、必、涙が滲んで來た。殊に中央停車場から汽車に乗らうとする間際、そつとこの手紙を彼女に渡した照子の姿を思ひ出すと、何とも云はれずにいぢらしかつた。が、彼女の結婚は果して妹の想像通り、全然犠牲的なそれであらうか。さう疑を挟む事は、涙の後の彼女の心へ、重苦しい氣持を擲げ勝ちであつた。信子はこの重苦しさを避ける爲に、大抵はぢつと快い感傷の中に浸つてゐた。そのうちに外の松林へ一面に當つた日の光が、だんだん黄ばんだ暮方の色に變つて行くのを眺めながら。

二

結婚後彼は三月ばかりは、あらゆる新婚の夫婦の如く、彼等も亦幸福な日を送つた。

夫は何處か女性的な、口數を利かない人物であつた。それが毎日會社から歸つて來ると、必、晩飯後の何時間かは、信子と一しよに過す事にしてゐた。信子は編物の針を動かしながら、近頃世間に騒がれてゐる小説や戯曲の話などもした。その話の中には時によると、基督教の臭にほひのする女子大學趣味の人生觀が織りこまれてゐる事もあつた。夫は晩酌の頬を

赤らめた儘、讀みかけた夕刊を膝へのせて、珍しさうに耳を傾けてゐた。が、彼自身の意見らしいものは、一言も加へた事がなかつた。

彼等は又殆、日曜毎に、大阪やその近郊の遊覽地へ氣散じな一日を暮しに行つた。信子は汽車電車へ乗る度に、何處でも飲食する事を憚らない關西人が皆卑しく見えた。それだけおとなしい夫の態度が、格段に上品なのを嬉しく感じた。實際身綺麗な夫の姿は、さう云ふ人中に交つてみると、帽子からも、背廣からも、或は又赤皮の編上げからも、化粧石鹸の匂に似た、一種清新な雰圍氣を放散させてゐるやうであつた。殊に夏の休暇中、舞子まで足を延した時には、同じ茶屋に來合せた夫の同僚たちに比べて見て、一層誇りがましいやうな心もちがせずにはゐられなかつた。が、夫はその下卑た同僚たちに、存外親しみを持つてゐるらしかつた。

その内に信子は長い間、捨てゝあつた創作を思ひ出した。そこで夫の留守の内だけ、一二時間づつ机に向ふ事にした。夫はその話を聞くと、「愈、女流作家になるかね。」と云つて、やさしい口もとに薄笑ひを見せた。しかし机には向ふにしても、思ひの外ペンは進まなかつた。彼女はぼんやり頬杖をついて、炎天の松林の蟬の聲に、我知れず耳を傾けてゐる彼女自身を見出し勝ちであつた。

所が残暑が初秋へ振り變らうとする時分、夫は或日會社の出がけに、汗じみた襟を取變へようとした。が、生憎襟は一本残らず洗濯屋の手に渡つてゐた。夫は日頃身綺麗なだけに、不快らしく顔を曇らせた。さうしてズボン吊を掛けながら、「小説ばかり書いてゐちや困る。」と何時になく厭味を云つた。信子は黙つて眼を伏せて、上衣の埃を拂つてゐた。

それから二三日過ぎた或夜、夫は夕刊に出てゐた食糧問題から、月々の經費をもう少し輕減出來ないものかと云ひ出した。「お前だつて何時までも女學生ぢやあるまいし。」——そんな事も口へ出した。信子は氣のない返事をしながら、夫の襟飾の縞刺しをしてゐた。すると夫は意外な位執拗に、「その襟飾にしてもさ、買ふ方が反つて安くつくぢやないか。」と、やはりねちねちした調子で云つた。彼女は猶更口が利けなくなつた。夫もしまひには白けた顔をして、つまらなさうに商賣向きの雑誌か何かばかり讀んでゐた。が、寢室の電燈を消してから、信子は夫に背を向けた信、「もう小説なんぞ書きません。」と、囁くやうな聲で云つた。夫はそれでも黙つてゐた。暫くして彼女は、同じ言葉を前よりもかすかに繰返した。それから間もなく泣く聲が洩れた。夫は二言三言彼女を叱つた。その後でも彼女の啜

泣きは、まだ絶え絶えに聞えてゐた。が、信子は何時の間にか、しつかりと夫にすがつてゐた。……

翌日彼等は又元の通り、仲の好い夫婦に返つてゐた。

と思ふと今度は十二時過ぎてても、まだ夫が會社から歸つて來ない晩があつた。しかも漸く歸つて來ると、雨外套も一人では脱げない程、酒臭い匂を呼吸してゐた。信子は眉をひそめながら、甲斐々々しく夫に着換へさせた。夫はそれにも關らず、まはらない舌で皮肉さへ云つた。「今夜は僕が歸らなかつたから、餘つ程小説が抄取つたらう。」——さう云ふ言葉が、何度となく女のやうな口から出た。彼女はその晩床にはひると、思はず涙がほろほろ落ちた。こんな處を照子が見たら、どんなに一しよに泣いてくれるであらう。照子。照子。私が便りに思ふのは、たつたお前一人ぎりだ。——信子は度々心の中でかう妹に呼びかけながら、夫の酒臭い寢息に苦しまされて、殆、夜中まんじりともせず、寢返りばかり打つてゐた。

が、それも亦翌日になると、自然と仲直りが出來上つてゐた。

そんな事が何度か繰返される内に、だんだん秋が深くなつて來た。信子は何時か机に向

つて、ペンを執る事が稀になつた。その時にはもう夫の方も、前程彼女の文學談を珍しがらないやうになつてゐた。彼等は夜毎に長火鉢を隔てて、瑣末な家庭の經濟の話に時間を殺す事を覺え出した。その上又かう云ふ話題は、少くとも晩酌後の夫にとつて、最も興味があるらしかつた。それでも信子は氣の毒さうに、時々夫の顔色を窺つて見る事があつた。が、彼は何も知らず、近頃延した髭を噛みながら、何時もより餘程快活に、「これで子供でも出來て見ると——」などと、考へ考へ話してゐた。

するとその頃から月々の雑誌に、從兄いとこの名前が見えるやうになつた。信子は結婚後忘れたいやうに、俊吉との文通を絶つてゐた。唯、彼の動靜は、——大學の文科を卒業したとか、同人雑誌を始めたとか云ふ事は、妹から手紙で知るだけであつた。又それ以上彼の事を知りたいと云ふ氣も起きなかつた。が、彼の小説が雑誌に載つてゐるのを見ると、懐しさは昔と同じであつた。彼女はその頁をはぐりながら、何度も獨り微笑を洩らした。俊吉はやはり小説の中でも、冷笑と諧謔との二つの武器を宮本武藏のやうに使つてゐた。彼女にはしかし氣のせるか、その輕快な皮肉の後に、何か今までの從兄いとこにはない、寂しさうな捨鉢の調子が潜んでゐるやうに思はれた。と同時にさう思ふ事が、後めたいやうな氣もしない

ではなかつた。

信子はそれ以来夫に對して、一層優しく振舞ふやうになつた。夫は夜寒の長火鉢の向うに、何時も晴れ々と微笑してゐる彼女の顔を見出した。その顔は以前より若々しく、化粧をしてゐるのが常であつた。彼女は針仕事の店を擱げながら、彼等が東京で式を擧げた當時の記憶なども話したりした。夫にはその記憶の細かいのが、意外でもあり、嬉しさうでもあつた。「お前はよくそんな事まで覚えてゐるわ。」——夫にかう調戲たからかはれると、信子は必、無言の儘、眼にだけ媚のある返事を見せた。が、何故それ程忘れずにゐるか、彼女自身も心の内では、不思議に思ふ事が度々あつた。

それから程なく、母の手紙が、信子に妹の結納が済んだと云ふ事を報じて來た。その手紙の中には又、俊吉が照子を迎へる爲に、山の手の或郊外へ新居を設けた事もつけ加へてあつた。彼女は早速母と妹とへ、長い祝ひの手紙を書いた。「何分當方は無人故、式には不本意ながら参りかね候へども……」——そんな文句を書いてゐる内に、(彼女には何故かわからなかつたが、)筆の遊あそぶ事も再三あつた。すると彼女は眼を擧げて、必、外の松林を眺めた。松は初冬の空の下に、簇々むらむらと蒼黒く茂つてゐた。

その晩信子と夫とは、照子の結婚を話題にした。夫は何時もの薄笑ひを浮かべながら、彼女が妹の口眞似をするのを、面白さうに聞いてゐた。が、彼女には何となく、彼女自身に照子の事を話してゐるやうな心もちがした。「どれ、寝るかな。」——二三時間の後、夫は柔な髭を撫でながら、太儀さうに長火鉢の前を離れた。信子はまだ妹へ祝つてやる品を決し兼ねて、火箸で灰文字を書いてゐたが、この時急に顔を擧げて、「でも妙なものね。私にも弟が一人出来るのだと思ふと」と云つた。「當り前ぢやないか、妹もゐるんだから。」——彼女は夫にかう云はれても、考深い眼つきをした儘、何とも返事をしなかつた。

照子と俊吉とは、師走の中旬に式を擧げた。當日は午少し前から、ちらちら白い物が落ち始めた。信子は獨り午ひるの食事をすませた後、何時までもその時の魚の匂が、口について離れなかつた。「東京も雪が降つてゐるかしら。」——こんな事を考へながら、信子はちつとうす暗い茶の間の長火鉢にもたれてゐた。雪は愈、烈しくなつた。が、口中の生臭なまじさは、やはり執念く消えなかつた。……

信子はその翌年の秋、社命を帯びた夫と一しよに、久しぶりで東京の土を踏んだ。が、短い期限内に、果すべき用向きの多かつた夫は、唯彼女の母親の所へ、來^き匆々^き顔を出した時の外は、殆、一日も彼女をつれて、外出する機会を見出さなかつた。彼女はそこで妹夫婦の郊外の新居を尋ねる時も、新開地じみた電車の終點から、たつた一人俤に揺られて行つた。

彼等の家は、町並が葱畑に移る近くにあつた。しかし隣近所には、いづれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べてゐた。のき打ちの門、要^{かま}もちの垣、それから竿に干した洗濯物、——すべてがどの家も變りはなかつた。この平凡な住居の容子は、多少信子を失望させた。

が、彼女が案内を求めた時、聲に應じて出て來たのは、意外にも從^{いとこ}兄の方であつた。俊吉は以前と同じやうに、この珍客の顔を見ると、「やあ」と快活な聲を揚げた。彼女は彼が何時の間にか、いが栗頭でなくなつたのを見た。「暫らく」「さあ、お上り。生憎僕一人だ。」「照子は？ 留守？」「使に行つた。女中も。」「信子は妙に恥しさを感^{かん}じながら、派手な裏のついた上衣^{コート}をそつと玄關の隅に脱いだ。

俊吉は彼女を書齋兼客間の八疊へ坐らせた。座敷の中には何處を見ても、本ばかり亂雑に積んであつた。殊に午後の日^ひの當つた障子際の、小さな紫檀の机のまはりには、新聞雜誌や原稿用紙が、手のつけやうもない程散らかつてゐた。その中に若い細君の存在を語つてゐるものは、唯床の間の壁に立てかけた、新しい一面の琴だけであつた。信子がかう云ふ周圍から、暫らく物珍しい眼を放さなかつた。

「來る事は手紙で知つてゐたけれど、今日來ようとは思はなかつた。」「俊吉は巻煙草へ火をつけると、さすがに懐しさうな眼つきをした。「どうです、大阪の御生活は？」「俊さんこそ如何？ 幸福？」——信子も亦二言三言話す内に、やはり昔のやうな懐しさが、よみ返つて來るのを意識した。文通さへ碌にしなかつた、彼是二年越しの氣まづい記憶は、思つたより彼女を煩さなかつた。

彼等は一ツ火鉢に手をかざしながら、いろいろな事を話し合つた。俊吉の小説だの、共通な知人の噂だの、東京と大阪との比較だの、話題はいくら話しても、盡きない位澤山あつた。が、二人とも云ひ合せたやうに、全然暮し向きの問題には觸れなかつた。それが信子には一層從^{いとこ}兄と、話してゐると云ふ感^{かん}じを強くさせた。

時々はしかし沈黙が、二人の間に來る事もあつた。その度に彼女は微笑した儘、眼を火鉢の灰に落した。其處には待つとは云へない程、かすかに何かを待つ心もちがあつた。すると故意か偶然か、俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破つた。彼女は次第に従兄いとせの顔を窺はずにはゐられなくなつた。が、彼は平然と巻煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を裝つてゐる氣色も見えなかつた。

その内に照子が歸つて來た。彼女は姉の顔を見ると、手をとりはなばかりに嬉しがつた。信子も唇は笑ひながら、眼には何時かもう涙があつた。二人は暫くは俊吉も忘れて、去年以來の生活を互に尋ねたり尋ねられたりしてゐた。殊に照子は活き活きと、血の色を頬に透かせながら、今でも伺つてゐる鶏の事まで、話して聞かせる事を忘れなかつた。俊吉は巻煙草を啣へた儘、満足さうに二人を眺めて、不相變にやにや笑つてゐた。

其處へ女中も歸つて來た。俊吉はその女中の手から、何枚かの端書を受取ると、早速、側の机へ向つて、せつせとペンを動かし始めた。照子は女中も留守だつた事が、意外らしい氣色を見せた。「ちや、御姉様がいらしつた時は、誰も家にゐなかつたの。」「ええ、俊吉さんだけ。」「信子はかう答へる事が、平氣を強ひるやうな心もちがした。すると俊吉が、

向うを向いたなり、「旦那様に感謝しろ。その茶も僕が入れたんだ。」と云つた。照子は姉と眼を見合せて、惡戯いたづらさうにくすり、と笑つた。が、夫にはわざとらしく、何とも返事をしなかつた。

間もなく信子は、妹夫婦と一しよに、晩飯の食卓を圍む事になつた。照子の説明する所によると、膳に上つた玉子は皆、家の鶏が産んだものであつた。俊吉は信子に葡萄酒をすすめながら、「人間の生活は掠奪で持つてゐるんだね。小はこの玉子から——」などと社會主義じみた理窟を並べたりした。その辯此處にゐる三人の中で、一番玉子に愛着のあるのは俊吉自身に違ひなかつた。照子はそれが可笑しいと云つて、子供のやうな笑ひ聲を立てた。信子はかう云ふ食卓の空氣にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思ひ出さずにはゐられなかつた。

話は食後の果物を荒した後も盡きなかつた。微醉を帯びた俊吉は、夜長の電燈の下にあぐらをかいて、盛に彼一流の詭辯を弄した。その談論風發が、もう一度信子を若返らせた。彼女は熱のある眼つきをして、「私も小説を書き出さうかしら。」と云つた。すると従兄は返事をする代りに、ダウルモンの警句を抛りつけた。それは「ミユウズたちは女だから、彼等

を自由に虜にするものは、男だけだ。」と云ふ言葉であつた。信子と照子とは同盟して、グウルモンの權威を認めなかつた。「ぢや女でなければ、音楽家になれなくつて？ アポロは男ぢやありませんか。」——照子は眞面目にこんな事まで云つた。

その暇に夜が更けた。信子はとうとう泊る事になつた。

寝る前に、俊吉は、縁側の雨戸を一枚開けて、寢間着の儘、狭い庭へ下りた。それから誰を呼ぶともなく、「ちよいと出て御覧。好い月だから。」と聲をかけた。信子は獨り彼の後から、沓脱ぎの庭下駄へ足を下した。足袋を脱いだ彼女の足には、冷たい露の感じがあつた。

月は庭の隅にある、瘦せがれた檜の梢にあつた。従兄はその檜の下に立つて、うす明い夜空を眺めてゐた。「大へん草が生えてゐるのね。」——信子は荒れた庭を氣味悪さうに、怯づ怯づ彼のゐる方へ歩み寄つた。が、彼はやはり空を見ながら、「十三夜かな。」と呟いただけであつた。

暫く沈黙が続いた後、俊吉は靜に眼を返して、「鶏小屋へ行つて見ようか。」と云つた。信子は黙つて頷いた。鶏小屋は丁度檜とは反對の庭の隅にあつた。二人は肩を並べながら、

ゆつくり其處まで歩いて行つた。しかし席圍ひの内には、唯鶏の匂のする、臙げな光と影ばかりあつた。俊吉はその小屋を覗いて見て、殆、獨り言かと思ふやうに、「寢てゐる。」と彼女に囁いた。「玉子を人に取りられた鶏が。」——信子は草の中に佇んだ儘、さう考へずにはゐられなかつた。……

二人が庭から返つて來ると、照子は夫の机の前に、ぼんやり電燈を眺めてゐた。青い横ばひがたつた一つ、笠に這つてゐる電燈を。

四

翌朝俊吉は一張羅の背廣を着て、食後匆々玄關へ行つた。何でも亡友の一周忌の墓參をするのだとか云ふ事であつた。「好いかい。待つてゐるんだぜ。午頃までにやきつと歸つて來るから。」——彼は外套をひっかけながら、かう信子に念を押した。が彼女は華奢な手に彼の中折を持つた儘、黙つて微笑したばかりであつた。

照子は夫を送り出すと、姉を長火鉢の向うに招じて、まめまめしく茶をすすめなどした。隣の奥さんの話、訪問記者の話、それから俊吉と見に行つた或外國の歌劇團の話、——そ

の外愉快なるべき話題が、彼女にはまだいろいろあるらしかった。が、信子の心は沈んでゐた。彼女はふと気がつくとき、何時も好い加減な返事ばかりしてゐる彼女自身が其處にあつた。それがとうとうしまひには、照子の眼にさへ止るやうになつた。妹は心配さうに彼女の顔を覗きこんで、「どうして？」と尋ねてくれたりした。しかし信子にもどうしたのか、はつきりした事はわからなかつた。

柱時計が十時を打つた時、信子は懶さうな眼を擧げて、「俊さんは中々歸りさうもないわね。」と云つた。照子も姉の言葉につれて、ちよいと時計を仰いだが、これは存外冷淡に、「まだ——」とだけしか答へなかつた。信子にはその言葉の中に、夫の愛に飽き足りてゐる新妻の心があるやうな氣がした。さう思ふと愈、彼女の氣もちは、憂鬱に傾かずにはゐられなかつた。

「照さんは幸福ね。」——信子は頷を半襟に埋めながら、冗談のやうにかう云つた。が、自然と其處へ忍びこんだ、眞面目な羨望の調子だけは、どうする事も出来なかつた。照子はしかし無邪氣らしく、やはり活き活きと微笑しながら、「覚えていらつしやい。」と睨む眞似をした。それからすぐに又「御姉様だつて幸福の癖に。」と、甘えるやうにつけ加へた。その

言葉がびしりと信子を打つた。

彼女は心もち脛すねを上げて、「さう思つて？」と問ひ返した。問ひ返して、すぐに後悔した。照子は一瞬間妙な顔をして、姉と眼を見合せた。その顔にも亦蔽ひ難い後悔の色が動いてゐた。信子は強ひて微笑した。——「さう思はれるだけでも幸福ね。」

二人の間には沈黙が來た。彼等は柱時計の時を刻む下に、長火鉢の鐵瓶がたぎる音を聞くともなく聞き澄ませてゐた。

「でも御兄様はお優しくはなかつて？」——やがて照子は小さな聲で、恐る恐るかう尋ねた。その聲の中には明かに、氣の毒さうな響が籠つてゐた。が、この場合信子の心は、何よりも憐憫を反撥した。彼女は新聞を膝の上へせて、それに眼を落したなり、わざと何とも答へなかつた。新聞には大阪と同じやうに、米價問題が掲げてあつた。

その内に靜な茶の間の中には、かすかに人の泣くけはひが聞え出した。信子は新聞から眼を放して、袂を顔に當てた妹を長火鉢の向うに見出した。「泣かなくなつたつて好いのよ。」

——照子は姉にさう慰められても、容易に泣き止まうとはしなかつた。信子は殘酷な喜びを感じながら、暫くは妹の震へる肩へ無言の視線を注いでゐた。それから女中の耳を憚る

やうに、照子の方へ顔をやりながら、「悪かつたら、私があやまるわ。私は照さんさへ幸福たら、何より有難いと思つてゐるの。ほんたうよ。俊さんが照さんを愛してくれれば——」と、低い聲で云ひ續けた。云ひ續ける内に、彼女の聲も、彼女自身の言葉に動かされて、だんだん感傷的になり初めた。すると突然照子は袖を落して、涙に濡れてゐる顔を擧げた。彼女の眼の中には、意外な事に、悲しみも怒りも見えなかつた。が、唯、抑へ切れない嫉妬の情が、燃えるやうに瞳を火照らせてゐた。「ちや御姉様は——御姉様は何故昨夜も——」照子は皆まで云はない内に、又顔を袖に埋めて、發作的に烈しく泣き初めた。

……

二三時間の後、信子は電車の終點に急ぐべく、幌俵の上に揺られてゐた。彼女の眼には、ひる外の世界は、前部の幌を切りぬいた、四角なセルロイドの窓だけであつた。其處には、場末らしい家々と色づいた雑木の梢とが、徐にしかも絶え間なく、後へ後へと流れて行つた。もしその中に一つでも動かないものがあれば、それは薄雲を漂はせた、冷やかな秋の空だけであつた。

彼女の心は靜かであつた。が、その靜かさを支配するものは、寂しい諦めに外ならな

つた。照子の發作が終つた後、和解は新しい涙と共に、容易く二人を元の通り仲の好い姉妹に返してゐた。しかし事實は事實として、今でも信子の心を離れなかつた。彼女は從兄の歸りも待たず、この車上に身を托した時、既に妹とは永久に他人になつたやうな心もちが、意地悪く彼女の胸の中に氷を張らせてゐたのであつた。

信子はふと眼を擧げた。その時セルロイドの窓の中には、こみこみした町を歩いて来る、杖を抱へた從兄の姿が見えた。彼女の心は動揺した。俵を止めようか。それともこの儘行き違はうか。彼女は動悸を抑へながら、暫くは唯幌の下に、空しい逡巡を重ねてゐた。が、俊吉と彼女との距離は、見る見る内に近くなつて來た。彼は薄日の光を浴びて、水溜りの多い往來にゆつくりと靴を運んでゐた。

「俊さん。——」さう云ふ聲が一瞬間、信子の肩から洩れようとした。實際俊吉はその時も、彼女の俵のすぐ側に、見慣れた姿を現してゐた。が、彼女は又ためらつた。その暇に何も知らない彼は、とうとうこの幌俵とすれ違つた。薄濁つた空、疎な屋並、高い木々の黄ばんだ梢、——後には不相變人通りの少い場末の町があるばかりであつた。

「秋——」

信子はうすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。

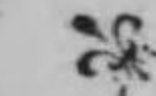
—了—

大正十一年三月十日印刷
大正十一年三月十五日發行

(定價五拾五錢)

◀軍 將▶	
發行者	著作者
佐藤義亮	芥川龍之介
東京市牛込區矢來町三番地	
發行所	
新潮社	
東京市牛込區矢來町三番地	
電話番町	
八八八〇〇〇	
九八七番番番	
番二四七一(京東)替振	

印刷所 東京市小石川區西江月川町
電話小石川五九二番
富士印刷株式會社
印刷者 佐々木俊一



世評高き長篇小説

中村武羅夫氏著

■ 人生 (1) 悪の門 (2) 獣人

各壹圓四拾錢、送料各八錢

生田春月氏著 (全三册)

■ 相ひ寄る魂

(上卷) 定價貳圓 (中卷) 壹圓六拾錢 送料各八錢

岡田三郎氏著

■ 青春

價壹圓六拾錢、送料八錢

細田源吉氏著

■ 罪に立つ

價貳圓六拾錢、送料拾貳錢

隠れたる文壇の偉才中村氏が十年の雌伏より起つて公にせる稀有の大長篇にして全八部、十六卷、八千枚の大長篇、これに先づ第一第二の兩卷を公にせしが、果して大歡迎を受け、忽ち十五版となれり。

熱烈なる戀愛小説たると共に、文壇の裏面を憚る所なく活寫せるの點に於て、極めて興味多き物語たり、構想の雄大と描寫の靈活とを以て稀有の名篇と稱せられ既刊の上巻中巻は盛なる賣行を示せり。

操無く美しくしき女に戀して絶望的なる耽溺に身心の荒むに任する一青年の性慾生活を中心として描けるもの。嵐の如く炎の如く、激しくもの狂はしき青年の姿を看よ。情景の絢爛、濃彩の繪卷の如し。

母と娘が一つの戀に狂ふ暗黒の事實を中心として放恣なる學生々活の活圖の中に矛盾を悉くせる時代精神の諸相を展開せる傑作。描寫の精到と觀照の慎重とは稀に見る所と稱せらる。一千二百枚の雄篇。

世評高き長篇小説

加能作次郎氏著

■ 若き日

價貳圓參拾錢、送料拾貳錢

吉田絃二郎氏著

■ 無限

價貳圓貳拾錢、送料拾貳錢

藤森成吉氏著

■ 若き日の悩み

價壹圓四拾錢、送料八錢

加藤武雄氏著

■ 悩ましき春

價貳圓、送料拾錢

一人の青年が、性の悩みの幾多の女性と結んで次ぎ／＼に起りゆく戀愛事件を描き來り描き去れるもの。卷を開けば如何なる頁も殆ど愛慾の情景を示さざるはなし。一卷稀有の熱烈なる大戀愛小説也。

淫蕩なる兄と若き理想家の弟とを有する多情多恨の陸軍中尉を主人公とし其失はれたる戀に對する已み難き悩みと不可解の人生に對する涯なき惑いとを描く。規模の雄大と内容の複雑は文壇眞に稀有。

増版既に幾十回、以ていかに多くいかに廣く讀まれたるかを知るに足らん。伊豆の大島を背景として多感の青年と美しき島乙女との戀を中心となし若き日の悩みこゝろを殘る所なく描ける不朽の名篇。

北相模の寒村に在りて、文學に對する希望と、性の悩みに悶ゆる主人公が、東都に出で、中央文壇に身を投ずるに至るの徑路を描く。熱烈なる戀愛小説なると共に、文壇の或時期の如實なる好記録也。

的代表

名作選集

明治大正の傑作全集
定價は破天荒の至廉
賣高既に百七十萬部

▼▼▼
一冊五拾五錢
送料一冊六錢

第一 牛肉と馬鈴薯 獨歩	第十三 耽	廿五 物言はぬ顔 未明
第二 坊っちゃん 漱石	第十四 明治詩歌選 六家	廿六 ふところ日記 眉山
第三 蒲 團花袋	第十五 戀ざめ 風葉	廿七 鱧の皮 小劍
第四 透谷選集 透谷	十六 別れた妻 秋江	廿八 女役者 俊子
第五 春 (上) 藤村	十七 はつ姿 天外	廿九 南小泉村 青果
第六 春 (下) 藤村	十八 お艶殺し 潤二郎	三十 少年行 星湖
第七 わが袖の記 樗牛	十九 俳諧 師 虛子	卅一 啄木選集 啄木
第八 爛れ 秋聲	二十 煤煙 (上) 草平	卅二 運命の丘 抱月
第九 平 凡 四迷	廿一 煤煙 (下) 草平	卅三 和 解 直哉
第十 高野 聖鏡花	廿二 子規花 枕子規	卅四 末 枯万太郎
十一 何處へ 白鳥	廿三 そ の 妹 實篤	卅五 善心惡心 里見壽
十二 今戸心中 柳浪	廿四 旅 役者 幹彦	卅六 俊 寬菊池寬

71
600

終